平成 26 年度

アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム

助成校　実践報告資料

20 校

公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟

学校名	気仙沼市立鹿折小学校
担当教員名	畠山　政明

活動のテーマ	自分の将来，そして地域の未来を安心して創造できる児童の育成 ～自助・共助の力を育む防災学習の実践を通して～
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間，生活科，学級活動）　　参加児童（全校２１８名）
実践期間	平成　２６年　４月　～　平成　２７年　３月
想定する災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 (地震)・(津波)・台風・洪水・河川氾濫・土砂・(その他)（　火災　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

・　自分と人やもの，社会，自然環境との関わりやつながりが分かり，よりよい関わりをつくろうとする児童を育てる。

・　自分の命について考え，関わりのある人たちの命，そして関わりのあるすべての場所やものについて考え，自分なりに判断し行動する児童を育てる。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

５月	１年１組	・教室で地震が起きたら，安全な場所でダンゴムシのポーズを取り,身を守ることを学習した。
９月	６年１組 ２組	・避難所のくらしや防災ボランティア等について調べた。 ・災害時に備えた備蓄品について調べることを通して，進んで他の人々や集団，地域の安全に役立つことは何かを考えた。
１１月	１年１組	・教室以外の校舎内で，地震が起きたらどこでダンゴムシのポーズを取って身を守ったらよいか，校舎内を回りながら考えた。
	２年１組	・津波の怖さについて映像資料で確認し，体育館に再現した鹿折地区の場の設定をもとに津波が来るかもしれないときの避難の仕方を考えた。
１２月	４年１組	・地域に出て，津波から避難するための場所やそこまでの経路等について調べ，防災マップを作成した。 ・地図にまとめた内容を発表し合いながら，安全に避難する方法を考えた。
	３年１組	・４年生が作った防災マップの発表会に参加し，危険な場所や避難場所について考えた。 ・危険な場所や避難場所を確認し，地震や津波が起きたときの対応の仕方について話し合った。
１月	５年１組 ２組	・昨年度，自分たちで作った防災マップを再度，振り返り，改めて避難場所の確認をした。 ・６年生になったときの防災学習の準備として，今，自分でできる災害への準備について考えた。

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・　階上中学校で生徒から直接，防災の取組の様子を聞くことができた。中学校での「共助」の取組を本校の高学年の取組に生かした。

・　学区内地図を作成し，児童の居所を確認した。その地図によって，災害時の安全な避難経路を考えることができるようになった。また，児童のフィールドワークによる防災マップ作りなどがしやすくなった。

4）実践の成果

① 減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

今年度，新たに教科領域等との関連を明確にしつつ，気仙沼市「防災学習シート」と対応させて実践に取り組んだ。教科領域等と関連付けながら系統的に取り組んだことにより，防災学習を効果的に進めることができた。

② 児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり，どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・ 低学年では，緊急時の自分の身の守り方について考えることを通して状況に応じた命を守るための判断が少しずつできるようになった。

・ 中学年では，フィールドワーク・防災マップ作り・発表会を通して，地域の人たちとのコミュニケーション能力や情報収集能力，情報発信能力が身に付いてきている。

・ 高学年では，避難所のくらしや防災ボランティアについて，自分たちでできることを調べることを通して，安心･安全な生活を目指していくための行動力が身に付いてきている。

２年１組 地震が起きたらどうするか

③ 教師や保護者，地域，関係機関等（児童生徒以外）の視点から

４年生では，フィールドワークや防災マップ作り・発表会を通して，地域の人たちとのコミュニケーションを図ったり，保護者への防災教育についての啓発をしたりすることができた。

また，ほかの学年についても学校で実施している防災学習の様子や成果をお便りや参観日で紹介してきたことにより，保護者との連携が進んできている。

４年１組　防災マップを作ろう

5）自校の実践で工夫した点，特筆すべき点

・ 昨年度から，２年間に渡り校内研究で防災学習を扱い，全校で授業作りに取り組んできた。

・ 今年度は，気仙沼市から配布された「防災学習シート」を積極的に活用し，学年ごとの学習内容を発達段階に合わせて系統的に位置付け，実践を積み重ねてきた。

6）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

今年度，１年生から６年生までの具体的なカリキュラムを作成し，実践することができたが，さらに，小学校教科書改訂に対応した教科領域等との関連を図った年間指導計画を作成していかなければならないと考えている。

7）その他（※特にあれば記述）

特になし

学校名	宮城県気仙沼市立階上小学校
担当教員名	教諭　遠藤　宏紀

活動のテーマ	危険を予知し，状況に応じて冷静に判断し，主体的に行動できる児童の育成
主な教科領域等	総合的な学習の時間，生活科，各教科，学校行事
活動の実施期間	平成２６年４月１日～平成２７年３月３１日
想定する災害	地震・津波

活動報告

１）活動の目的・ねらい

児童が主体的に行動できる知識や態度を養うために，「防災教育年間指導計画に基づいた気仙沼市防災学習シートを活用した防災教育の授業（カリキュラムの構築)」，「地域間の連携」，「学校間の連携」，「専門機関との連携」を取り入れながら，実践を積み重ねてきた。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール

（１）「防災教育年間指導計画に基づいた気仙沼市防災学習シートを活用した防災教育の授業」

各学年で実施する防災教育の重点化を図った。

＜各学年の主な防災・減災活動の主な実践内容例＞

１年災害発生時の身の守り方	２年災害発生時の避難方法	３年津波から身を守るために
４年非常持ち出し袋の中身を考えよう	５年防災マップ作ろう	６年階上小・中防災キャンプ

（２）「地域間の連携」

「階上地区防災教育推進委員会」

年に３回実施した。各地区自治会長や警察，行政職員などが集まり，各地区の防災に関わる取り組みや課題を話し合った。

（３）「学校間の連携」

①階上小中防災キャンプ

７月下旬に，階上中学校を会場に，階上小学校６年生と階上中学校２年生の希望者で１泊２日の日程で実施した。階上地区において想定される災害や被災時の対応等の理解，学校等を避難所とした生活体験などの防災教育プログラムを実践した。

②階上中３年による防災教室

階上中学校３年生が年に一回，防災教室に来校している。小学校低学年―中学年―高学年と発達段階に合わせて，紙芝居やワークショップなどを行い，防災知識を教えている。

③階上地区総合防災訓練（避難所設営訓練）

中学生１２１人と６年生３５人が避難所本部や救護所など避難所設営を行った。小学１～５年生は地区住民役で参加し，中学生や６年生の誘導で避難者リストに自分の名前を記入し，各地区ごとに集まり，避難所設営の様子を見学した。

（４）「専門機関との連携」

気仙沼市危機管理課，NPO団体と連携した授業実践を実施した。

６年生は，Seeds Asiaの栗原さんをコーディネーターとして，気仙沼市役所危機管理課の方々とともに階上地区の防災マップ作成の授業に取り組んだ。

３）９月の研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

９月の研修会では，NPOと連携して活動を進める「N助」について学んだ。６年生には，Seeds Asiaの栗原さんがコーディネーターとして，年間を通じて防災教育に関わっていただきながら取り組んだ。防災マップ作成では，気仙沼市役所危機管理課の方々に来校していただくなど，的確なアドバイスをいただくことで，より実践的な防災マップ作成となった。

また，助成金の活用によって可能となり，成果が得られたことが２点ある。１点目は，階上小学校と階上中学校の防災担当者が階上地区の防災教育の取り組みについて執筆した防災だより「共に！」の発行地域の充実である。発行地域の充実により，学校―地域の情報共有が円滑になり，階上地区総合防災訓練に多くの住民の方々（昨年度約８００名→約１１００名）の参加に繋がった。２点目は，マグネット式階上地区の地図の購入である。防災マップを作成していく上で効果的な教材となった。児童は，居住地域や通学路を地図上で表し，海との距離，道幅，標高等を多角的に考えながら，地図と向き合うことができた。

４）実践の成果

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から

本校の防災教育の柱として各学年の「総合的な学習の時間」に10時間程度，「防災教育年間指導計画に基づいた気仙沼市防災学習シートを活用した防災教育の授業」，「地域間の連携」，「学校間の連携」，「専門機関との連携」を取り入れながら，取り組んでいる。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり，どのような力（資質・能力・態度）を身に付けたか。

最終学年である６年生は，防災キャンプを実施し，これまでの防災教育の成果を発揮した。サバメシ作りや初期消火活動訓練，体育館宿泊体験などを小学生・中学生が協力し合いながら取り組むことで，災害時に児童自身が生命や身体を守るための最善の行動を判断する力が養われた。階上地区総合防災訓練においても中学生とともに避難所運営を体験するなど，地域の一員として主体的に行動する態度が身に付いた。

③教師や保護者，地域，関係機関（児童生徒以外）の視点から

階上地区防災訓練では，１１００名の地域の方々の参加があり，階上小・中学校を柱とした地区全体の防災意識の向上や学校―地域の情報共有が円滑になってきたことが実感できる結果となった。反省会においても，各地域の方々から小学生・中学生の防災意識の高さや地域の一員として主体的に行動する姿勢などが賞賛された。保護者にも，各学級の防災公開授業やPTA学年行事でのサバメシ作りなど児童と共に防災を学ぶ取り組みを学校から積極的に発信している。「家族で防災意識を高めるきっかけになる」と喜ばれている。

５）自校の実践で工夫した点，特筆した点

本校では，当初，副読本の活用場面として学活，道徳，教科等の関連する題材，単元での活用を試みてきたが，教科本来のねらいとの兼ね合いが難しい内容もあるので，既存のカリキュラムの組み替えを必要としない業前活動での活用を考え「防災タイム」を立ち上げた。これは第２，第４金曜日の業前１５分間で行う防災教育ショート指導で，副読本の１項目を，「内容を複数回に分けて扱う」，「読み物的にコンパクトに扱う」，「行事等に関連する部分だけ抜き出して扱う」など，独自の活用の仕方を工夫してきた。その結果，副読本の活用と防災教育の日常化を進めることができた。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

柱となる総合的な学習の時間と，日常実践である「防災タイム」との関連付けをどのように作り，効果的な防災教育を展開していくかが今後に向けた重要な課題となる。今後も「危険を予知し，状況に応じて冷静に判断し，主体的に行動できる児童の育成」のために「防災教育年間指導計画に基づいた気仙沼市防災学習シートを活用した効果的な防災教育の授業の充実」，「地域間の連携」，「学校間の連携」，「専門機関との連携」を継続し，充実させながら実践を積み重ねていきたいと考えている。

学校名	茨城県神栖市立波崎小学校
担当教員名	山口　慎司

活動のテーマ	自ら考え，判断し，危険に適切に対応する力を育む防災教育の在り方
主な教科領域等	教科領域（各教科，道徳，特別活動，総合的な学習の時間）， 参加児童（１～６学年　２７１名）
実践期間	平成２６年４月１日　～　平成２７年３月３１日
想定する災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 (地震)・(津波)・ 台風 ・(洪水)・ 河川氾濫 ・ 土砂 ・ その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

① 災害時における危険を認識し，日常の備えを行うとともに，状況に応じて的確な判断の下，自らの命・安全を確保するための行動ができる。（危険予測・主体的な行動）

② 自然災害発生のメカニズムをはじめとして，地域の自然環境，災害や防災についての基礎的・基本的事項を理解し，安全な行動をとるための判断に生かすことができる。（知識，思考・判断）

③ 災害発生時や事後に，進んで他の人々や集団，地域の安全に役立つことができる。（災害時の人とのかかわり）

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

① 研究発表会に向けての要請訪問（神栖市教育委員会指導主事を講師に招聘しての研究授業）
（６月３０日（月），７月８日（火））

② 防災をテーマにした保護者向け授業公開（授業参観）　７月４日(金)

③ 避難所生活体験（４年生対象）　７月２８日（月），２９日(火)

④ 波崎一中学区幼・小・中合同避難（引き渡し）訓練　９月２９日(月)

⑤ 神栖市教育委員会指定研究発表会（防災教育）　１１月２１日(金)

⑥ 防災マップの改訂（６年生）　４月～２月

⑦ 学習発表会　２月２０日(金)

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで(助成金を受ける前)の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

① 防災学習シートに記載された読み物資料の道徳や学級活動における活用

② 防災学習シートの活用による授業の見直し

③ 避難所生活体験において，非常食について知り，その試食ができた

④ ホワイトボードを活用することにより，防災教育の授業の中で言語活動の充実を図ることができた

4）実践の成果

①　減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

防災教育年間指導計画を作成することで，各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間や避難訓練等で各学年の発達段階に応じた計画的・継続的な指導ができるようになった。

②　児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

災害発生時における，自分の命や安全を確保するための必要な行動については，「倒れると危険なものから離れる」，「しゃがんで頭を守る」，「災害についての情報を得る」等，状況に応じその場で何が最優先か，的確に判断ができるようになり，「走って逃げる」，「安全な場所や高い所へ逃げる」など，漠然とした行動判断は減ってきた。

「予告なしの避難訓練」では，運動場にいた児童は，通報を聞いて中央に集まり，姿勢を低く保って待つことができ，どうしてよいかわからない低学年の児童の手を引く高学年の姿も見られた。校舎内にいた児童は，机の下にもぐり，次の通報で，避難場所へと移動するなど状況に応じ主体的に安全確保のための行動をとることができた。

社会・理科の授業及び，各学年の校外学習時における避難経路や避難場所の確認を通して，地域の自然環境，災害や防災についての知識を得ることができた。

児童は，避難所生活体験における様々な体験活動を通して，防災に関連する知識や判断力を高めることができた。実際に生活スペースを作り，そこで生活することで避難所生活での注意すべき点について気付くことができた。事後調査では，避難所では「静かにする，迷惑をかけない」という回答が増え，「分からない」と答えた割合が減った。災害時の人との係わりという点において，避難所生活体験は大変効果的であった。

③　教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

年間指導計画に沿った系統的な防災教育により，災害時の避難場所や連絡方法の確認等，家族で話し合う機会が増え，各家庭における防災意識の啓発に役立った。

5）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

①　防災教育年間指導計画の作成

各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間等全教育活動を通して防災教育を推進することができた。

②　津波防災マップの改訂

平成２４年度に茨城県の「地域と連携による学校の防災力強化推進事業」の指定を受け，津波防災マップを作成した。その後，平成２５年度，平成２６年度と地域の実態に合わせて改訂を行っている。

③　避難所生活体験

１泊２日の宿泊体験を通して生活スペース作り，簡易灯り作り，サバイバル飯作り等の体験を行った。この活動は３年間継続実施しているが，児童の防災に対する意識を高めると共に，今後も継続可能な活動となるように毎年、実施学年や内容等を見直している。

6）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

学級の防災コーナーの資料の定期的な更新，体験コーナーを含めた校内環境の見直しを行い，児童の防災への意識を維持・向上させていくことが重要である。

防災教育の授業を地域や児童の実態に沿ったものとし，効果的に実施していくために，防災教育における地域人材のリストアップや素材の開発と教材化が必要である。

7）その他（※特にあれば記述）

学校名	高岡市立成美小学校
担当教員名	高橋　和也

活動のテーマ	**夢　高岡未来会議～今の自分にできるこ|と～**
主な教科領域等	教科領域（　社会科・総合的な学習の時間　）参加児童（　　６学年　　８３名）
実践期間	平成　２６年　４月　１７日　　～　　平成　２７年　３月　１８日（予定）
想定する災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 (地震)・(津波)・ 台風 ・(洪水)・ 河川氾濫 ・ 土砂 ・ その他（　　）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

・　様々な人に守られている自分に気付き、地域の人への憧れをもったり、愛着を高めたりすることができる。

・　将来を担う一人として、正しい知識を活用し、今の自分にできることを考え、活動することができる。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール

	教科	総合的な学習の時間	他教科・他領域との関連
1学期	国語科「推薦スピーチをしよう」 ・他者へ伝える言語能力を高める。	○成美校区の人から学ぶ。 ・市役所　・消防分団　・自治会長 ○自分にできる活動を進めよう。 ・地域の問題を知る（調査活動） ・防災意識を高める活動を進める。 （防災マップ作り、パンフレット、ポスター作り） ○活動を伝えよう ・全校防災集会の実施 ・地域、保護者への呼びかけ	○ＢＦＣ編成式 （一員として、地域を巡る） ○全校防災会議の実施 （避難訓練前の事前学習、訓練後の振り返り学習） ○避難訓練の実施 （自らの課題を見付け、避難訓練を自ら提案する） ○ジュニア福祉活動 （地域の高齢者の方へのポスター配布）
2学期	理科「大地のつくりと変化」 ・災害のメカニズムについて知る		
3学期	社会科「わたしたちの願いをかなえる政治」 ・政治と防災の関係を知る。		

3）　9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

・　９月の研修会を終え、減災教育を行う際は、避難訓練で培う危機回避能力だけでなく、正しい知識を学び、活用していく力が求められることを学んだ。そこで、防災教育として、９月に学んだ東北の震災時の様子や現状、災害時に大切な行動の仕方、ポイントを６年生が全校集会を活用し、伝える場を設けた。

・　集会の際に、助成金で購入した視覚教材を活用することでより効果的な教育の場になった。

・　助成金で購入したデジタルカメラを子供の調べ学習の際に活用することで、放課後の時間に児童主体の調べ学習ができたり、その画像を防災マップに活用したりして、学びが発展した。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・　本校の減災教育の視点が、避難訓練主体から、減災に対する知識を得たり、その知識を活用して行動したりすることをねらいといした減災教育へと変化した。そして、教育活動全般で減災について学んだり、学年の発達段階に応じた減災教育を行ったりすることができた。

・　震災が起こるメカニズムを知ることで、より一層実際を想定した避難訓練を進めることができた。また、その現状を子供たちに伝えることで、震災に対する危機意識を高めることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身に付けたか。

・　市役所や消防署、消防分団、地区の避難訓練を計画している自治会長など、校区の防災に携わる人との関わりを通して、様々な人に守られている自分に気付き、地域の人への憧れを抱いたり、地域への愛着を深めたりすることができた。

・　自ら地域のために働きかけるパンフレットや防災マップを作り、配布する活動を通して、文章を書く力や相手に伝える力を高めることができた。また、異学年や校区に住む人に実際に伝えることでコミュニケーション能力を高めることができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・　減災教育に取り組むことで、多くの人との関わりを育むことができた。この関わりがこれからの成美小学校の教育の在り方につながっていくと考える。

・　児童の姿から保護者や地域の方から「元気をもらえた」という言葉をたくさん頂いた。また、児童の活動により、今まで準備していなかった避難袋を準備したり、避難所や方法を家族で話し合ったりする保護者も増えた。

5）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

・　本校では、６年生の児童が中心となり、全校防災会議や全校防災集会を企画している。学校のリーダーとして、「子供から子供へ」防災に対する意識を育み、伝えていくことで、学校全体の防災意識を高めることができる。そして、防災に対する取組を継続的に行う学校作りにつながる。

・　地域人材を積極的に活用することで、「地域から学ぶ子供」を育てることができた。そして、守られている自分に気付いたり、地域に愛着を深めたりする子供を育むことができた。

・　教員間で、防災意識への温度差を生まないように、職員会で避難訓練の方法を練り上げたり、振り返ったりした。そうすることで、防災主任一人で行うのでなく、全校協力体制の下、防災教育を進めることができ、避難訓練のレベルを上げることができた。

6）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

・　子供たちは無限の可能性を秘めている。教員が正しい知識を学び、児童に伝え、児童が自分ごととして考えることで、防災意識を高め、将来を担う子供を育てることができる。

・　学年の発達段階に応じた減災教育が大切だと感じた。全ての教育活動を振り返り、どの学年のどの教科領域に取り込むことができるか考え、計画的に実践することが大切である。

・　災害を身近に感じ、防災意識を高めていくことが大切である。児童、教員、地域で防災意識は高まりつつあるが、まだまだ高めることができると考える。防災意識を高めるためにどのようなことができるかをこれからも考えていきたい。

学校名	岸和田市立城北小学校
担当教員名	矢　倉　義　裕

活動のテーマ	**南海トラフ巨大地震を将来的に見据えた安全避難のあり方**
主な教科領域等	教科領域（　生活科・総合的な学習の時間　）　参加児童（　対象　全学年　４４６　名）
実践期間	平成　２６年　５月　２７日　　～　　平成　　２７年　１月　１９日
想定する災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

防災・減災教育で身につけさせたい力とは，「災害から身を守る力」である。つまり，「自分の命を自分で守る力」を全ての児童に身につけさせることである。そのため，教職員が確かな知識を持つことと，率先して防災意識を高めていくことが重要であり，保護者・地域が一体となって，防災に向けた判断力・行動力を高めていくことも大切であることをより啓発していく。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

	１～３年	４年	５年	６年
内容	「じしんのときのひなん」（絵本読み聞かせ）「じしんにあったら」（防災資料）	「被災支援活動者の体験談」をゲストテーチャーとして，招聘する。	「阿倍野防災センタの見学を1/19(月)に実施する	ＪＲＣプラグラムによる避難所体験等を12/12(金)に実施
流れ	・絵本の読み聞かせ，防災資料の話を聴くことで，避難の仕方がわかる	・災害時に自分の身を守る行動することの重要さを考える	・地震・津波発生のしくみや避難の仕方備えの大切さを知る	・炊き出し体験等避難行動のあり方やその備えについて体験する
ｽｹｼﾞｭｰﾙ	○避難訓練時や，年間を通して学習することで，速やかに行動ができる	○防災に関する話を聴いて，学校の取り組みを家庭に知らせる	○施設見学により得た知識をもとに話し合い活動を行う	○将来地域の防災リーダーとして活躍できる素地を養う

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点，助成金の活用で可能になったこと。

○日頃から，防災・減災教育に対する意識を持ちつづけ，身近に資料や教材を配置することの必要性。
○研修会で持ち帰った「防災学習シート」等を基本に研修や授業で活用することができた。
○地域と連携・協力しての総合避難訓練の実施。
○児童が実際に防災センターで体験学習を行った。
○避難所生活の体験として，話を聴くことや，材料を購入し，炊き出し体験・三角巾の使い方の指導等地域リーダーとしての資質向上を体得できた。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

○過去，防災・安全教育として，年３回避難訓練を実施している。今年度，この訓練のほかに，アクサ・ユネスコ協会　減災教育プログラムとして，前述のような様々な取り組みを行うことができた。このような先進的な実践を今後も続けていけるよう，教育課程にしっかり位置づけるとともに，予算面についても考えていかなくてはならない。

○それぞれの活動を，学年ごとに系統性をもって配置し，実践時期を考慮していかなくてはならない。そのためには，教職員が減災教育に対する認識を再度確認するための研修や，児童への教育内容の指導のあり方を論議しつつ，新しい情報も取り入れながら，減災教育プログラムを更新していく必要があるだろう。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり，どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

～児童の感想より～

私は一斉下校で，今までと違ったことを感じました。通学路で感じたことは，水に落ちた時通っている人が少ないので，「助かる率が低いな。」と思いました。もし，その災害にあってしまった時は，妹としっかり手をつなぎ危ないところはできるだけ避け，多くの人と帰りたいと思いました。

震災では，多くの人の命が失われました。私たちは自分の命は自分で守るという合い言葉を大切にし，一人でも多く助かることを願います。（６年）

以上のように，減災教育や避難訓練を通じて，児童には，災害時や避難時にしっかり命を守るという気持ちが培われていると考えられる。子どもたちの心に訴えていくような教育プログラムを構築していくことが重要である。

③教師や保護者，地域，関係機関等（児童生徒以外）の視点から

小学校の校舎は，地域の第1次指定避難場所となっているため，保護者や地域の人たちといっしょに子どもたちも避難するための合同訓練を行った。日曜日であるが，学校での学習中に地震・火災等の災害に遭うことを想定して，校庭や体育館に避難し，保護者への引き渡し訓練も実施した。また，校舎４階より消防署のはしご車にも，高所避難訓練を行った。

普段できないような避難訓練をすることで，実際被災した時の心構えが少し身についたと考える。今後，地域や公共機関とうまく連携・協力して，減災教育を続けていきたい。

５）自校の実践で工夫した点，特筆すべき点

３回目の地震・津波避難訓練では，避難開始後は学校前の公園に第１次避難場所として緊急避難し，地震等の事態が一端収束してから，第２次避難場所として学校の４階の特別教室に分かれて，各学年を避難させた。というのは，津波を回避するための高い建物が近くになく，一番安全な鉄筋コンクリート造り・海抜２０m相当の避難場所として，全員静かにルールを守って避難することができた。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

東日本大震災の話や避難所生活訓練を実施することで，その場の環境や雰囲気を疑似体験できたと考える。しかし，いざその時の状況にどこまで対応できるか不安がある。高学年児童が自分より小さい子に，声をかけ，励ましながら避難する態度が育成できるよう，これからも前向きに減災教育に取り組みたちと考えている。

これから地域を担う防災リーダーを育成していきたい。そのような思いを達成するため，日々災害に対する心構えや，命の大切さを意識した学習活動を実践していく。

７）その他（※特にあれば記述）

学校名	西条市立石根小学校
担当教員名	佐藤義弘

活動のテーマ	自分を守り、地域を守る　地域防災の担い手の育成
主な教科領域等	教科領域（総合的な学習の時間）参加生徒（６学年　１０名）
実践期間	平成２６年　７月　１６日　　～　　平成２６年１２月２５日
想定する災害	地震 ・ 津波 ・ 台風 ・ 洪水 ・ 河川氾濫 ・ 土砂 ・ その他（　　）

【活動報告】

１）　活動の目的・ねらい

・防災の必要感をもって主体的に学習に取り組み、防災についての知識、技能を高めることで、自然災害に備える実践力がもてるようにする。

・学習の成果を地域へ発信することで、地域が防災について考えるきっかけを作り、災害に強い地域づくりに貢献する。

２）　実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

前掲の活動のねらいを達成するために、学習を以下の４段階で展開した。

段階	各段階のテーマ	ねらい	学習活動
1	地域を知る	土砂災害への理解を深めるとともに、災害や防災への関心が高まるようにする。	(1)タウンウォッチング (2)聞き取り (3)防災マップづくり
2	災害について知る	各種団体の協力を得て土砂災害や地震等災害について理解の充実を図る。その際体験的な活動を通して備えの必要性を体感できるようにする。	(1)災害や防災について知っていることを書き出す (2)南海トラフ地震の被害想定を知る ア　県危機管理課作成DVD イ　西条市防災マップ (3)起震車体験・煙体験 (4)砂防学習会 (5)小松校区防災研修会
3	家庭で実践する	各家庭の防災上の課題について課題解決することで、各自の防災の知識や技能を高め、実践力がもてるようにする。	(1)図上演習(DIG) (2)家族会議 (3)個人の課題解決
4	地域へ貢献する	学習の成果を地域へ発信することで、地域の防災意識の向上に寄与するとともに、児童に地域防災の担い手としての使命感がもてるようにする。	(1)アンケートの実施による実態把握 (2)学習発表会 (3)防災すごろくの作成

３）　９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

○９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと

・写真資料をもとに全校児童に紹介し、東日本大震災の被災状況や、復旧もままならない現状について、研修を通して感じた思いとともに伝えた。

○研修会を受けての自校の活動の変更・改善点

・土砂災害に特化した取組を考えていたが、緊急性の高い南海トラフ地震への備えの必要性を痛感し、地震対応を視点として加えた。

・６年生だけでなく、防災は全学年で取り組むべき課題と位置付け、避難訓練時に全校児童が起震車体験、煙体験を行った。

○昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点

・地域への発信と啓発がより充実した。

○助成金の活用で可能になったこと

・助成金により成果物をより多くの家庭へ配布することができ、地域の防災意識を向上に役立った。

・被災時の体験談をたくさんの方から聞くことができて、災害をより豊かにイメージさせることができた。

４）　実践の成果

①　減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

○各種団体との連携による、多様な体験活動の実施：　災害や防災への関心が高まり、多くの情報であふれていることから知識を得ることは容易である。一方で被災経験はないことから、児童は具体的な災害のイメージをもつのに乏しく、防災の必要感をもちにくかった。そこで各種団体と連携し体験的な活動を取り入れることでそれを解消した。また各団体がもつ強みを生かした豊かな体験活動は、児童に防災への関心を高めて以後の学習の原動力となった。（写真１、２、３、４）

○児童の取り組む課題の選定：　これまで児童が課題解決する際、児童は非常食選びなど分かりやすい課題を選びがちであった。それらは必要な備えであるが、そこに目的意識が感じられなかった。今回は被災から時間が経過するごとにどんな課題が現れるかを明らかにして、優先的に取り組むべき課題を示した。すると児童は被災後すぐに命を落とすことがないように備えたいと考え、自然と家具の固定の必要性に気付いた。家庭における防災の向上を考えたときにも、何を課題として取り組むのかは重要である。

② 児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身に付けたか。

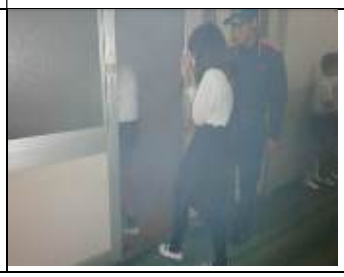
○社会とのつながり：児童は防災学習を通して、地域の方を始め多くの方が防災への意識をもち、様々な防災対策に従事していることに気付いた。普段は気付かなかったものに価値を見出し、多くの方が自分たちの生活を守ってくれていることに感謝の気持ちをもっていた。また学習の成果を地域へ発信することで、地域の防災意識が高まったことを知り、学習の達成感を得たり、自信を深めたりした。

○実践力の高まり：　ほとんどの家庭で十分な防災が行われていなかったこともあり、家庭での実践に取り組ませたことで、実践力が飛躍的に高まった。また「家では自分が一番防災にくわしい」という発言も聞かれ、家庭から「一緒に取り組んだが、防災の必要性を感じて積極的に活動していた」との感想を得るなど、家庭でリーダーシップをとり防災に取り組む児童が育った。

③ 教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

○防災教育の重要課題の変更：学校外で被災する可能性がほとんどであることを踏まえ、学校外で被災した場合に避難できる児童を育てるという視点を得た。また６年生だけでなく全児童を対象に防災学習を進めていくことを検討したり、校内の避難訓練を充実させたりする必要性を感じている。

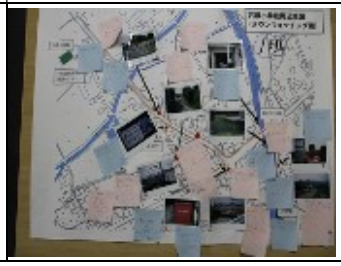
○家庭との連携：　アンケート調査により、各家庭の防災上の課題を把握した。それに基づいて学習を進めることで、学習の成果の発信が地域の防災意識をより効果的に高めることにつながった。

①起震車体験	②煙体験	③砂防学習会	④防災研修会
			

５）　自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

○過去の土砂災害の経験から学ぶことから学習を始めたことで、児童全員の防災への関心を高め、学習の必要感をもたせることができた。また過去の記憶を風化させることなく、被災したことから得た教訓を次世代へ継承することができた。（写真５，６）

○家庭の防災上の課題を明らかにし、それに基づいて防災学習を進めたことで、学校での学びがより効果的に地域へ広がり、防災意識を高めることにつながった。また学習の成果を防災すごろくの作成に生かし、ゲーム感覚で楽しみながら取り組めるようにしたことで、防災の必要性を多くの方に理解していただいた。（写真７，８）

⑤タウンウォッチング	⑥防災マップ	⑦劇の発表	⑧防災すごろくの紹介
			

６）　実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

○実践から得られた教訓や課題

・地域人材の活用と各種団体との連携により、より効果的に防災学習を進めることができた。また地域へ学習の成果を発信することは地域への啓発はもとより、児童にも学習の目的意識をもたせることができた。

・防災学習は全学年で取り組むべきである。また校内での避難訓練の充実はもちろん、学校外での危険に気づかせ、危機回避させることが課題である。

○今後の改善に向けた方策や展望：　全児童が身に付けるべきことと、各学年段階で身に付けていくのが望ましいことを明らかにし計画的に指導する。また近隣の保育所と連携して避難訓練を行うなどより効果的な活動のあり方を検討する。

学校名	愛媛県西条市立丹原小学校
担当教員名	安藤　宏幸　　黒河　真由美　　山下　祐紀

活動のテーマ	安全に、落ち着いて、早く逃げる「避難マニュアル」を提案する。
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間　）参加生徒（　６学年　６７　名）
実践期間	平成　２６年　７月　１　日　～　平成　２７年　２月　２７日（変更）
想定する災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（　　）

活動報告

1）活動の目的・ねらい

思考力・判断力を育てる防災教育を実践し、危機回避能力を育てることが重要と考える。防災教育の最終目的は、「命を守る」能力と知識・スキルを付けることではないだろうか。そのために、知識やスキル、能力を現実に活かす学習、問題解決学習を組み立てていきたい。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

命・避難プロジェクト学習

（身に付ける力）
○自分で考え、判断し、行動する力を育てる。
○自分の身近なことについてイメージできる力を育てる。
○自分の命を守る方法を考える力をつける。

フェーズ	学習内容	活動のイメージ
準備	・「判断行動イメージシート」をする。 ・「図上演習シート」をする。 などを通して、自分自身の防災や避難などの課題に気づく。	□ 体験を通して、自分なりの課題発見につなげる。 ・ビデオ、新聞記事などから地震に関係する情報を得る。 ・危機管理課の方の話を聞いて学習する。 ・実際に身近な所（教室・自宅）の危険場所を把握する。 **・避難シミュレーションシートをする。**
ビジョン・ゴール	・災害から命を守るために自分達でできることをしたいという願いをもつ。 ・目的と目標を明確にして、ビジョン（テーマ）、ゴールを決める。 ビジョン（テーマ）：目的（何のために） ゴール：目標（何をするか）	□ ビジョン・ゴールを決める。 ・ビジョン：地震の時に、「安全に」「早く」逃げたい ・ゴール：いざという時に、「安全に、早く」避難できる防災ノートを作る □ チームをつくる。 ・自分は何をしたいかを決め、同じ内容ごとにチームをつくる。（避難する場所、時、条件などを考えさせる。）
計画	・計画を立て、何をすべきかイメージをもつ。	□ チームで計画書・企画書を作成する。 □ 工程表（調べること・すること・分担・準備）をつくる。
情報・課題解決策	・避難訓練で現実の中から情報を得たり課題解決策を見出す 「避難訓練フィードバックシート」 ・チームのテーマにそって聞き取り・本・インターネットなどで情報を収集し、説得力のある確かな情報を得る。	□ 工程表にそって必要な情報を獲得する。 ・本やインターネットで調べる。 ・専門家にインタビューをする。 **・検証実験（「シェイクアウト」による避難訓練）** **・タウンウォッチング** **・避難シミュレーションシートをする。** **・西条市民一斉避難訓練**
制作	・自分たちのテーマにそった対策方法について説得力のある効果的な表現を考えながら、提示資料を作成する	□ プレゼンテーションの提示資料を作成する。 ・必要な情報を出し合い、チーム全体で確認する。 ・提案したいことの「根拠」を明確にする。 ・どんなプレゼンテーションにするか考える。
プレゼンテーション	・説得力のある効果的なパフォーマンスでプレゼンテーションする。	□ プレゼンテーションを行う。（家族や地域に提案する。） □ 仲間の発表を聞く。 □ アドバイスから、よかったことと課題を明らかにする。
再構築	・自分達のテーマにそった「避難」について、情報の根拠を明らかにし、考えを組み立てて表現する。	□ 再構築する方法を学ぶ。 □ 手順にそって下書きをする。 □ 再構築を行う。 □ プレゼンテーションやこれまでのポートフォリオをもとにして、「防災ノート」としてまとめる。
成長確認	・自分や仲間の成長を確認する。 ・身についた力を自覚する。	□ ポートフォリオを活用する。 □ プロジェクト学習を通して得たことを振り返り、自分の成長したことを確かめる。（「目に見える成長」「目に見えない成長」） □ 互いの成長を伝え合う。

ポートフォリオの活用

（学習の全過程で使用）

避難シミュレーションシートの活用

シェイクアウト

西条市民一斉避難訓練

タウンウォッチング

「凝縮」・・防災ブック

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

①地域との連携・・・地域を知る、地域との共同、安全な学校・地域をつくる

②命を守ることを通して、地域を守ることへ発展した。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

ア　地域との連携の活動を入れることにより、実践内容が具体的になり、活動の広がりがあった。

イ　地域や保護者への啓発になった。・・・地域や保護者の防災意識が高まりつつある。

ウ　学校だけでは、分からないことがある。

エ　地域の見直しや、再発見をすることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

ア　災害のイメージ力を高めることができ、災害を抽象的にとらえるのではなく、災害時前までにすべきこと、災害時にすべきこと、災害後にすべきことなど、具体的に「思考」することができた。

イ　災害を、少なくとも「自分ごと」としてとらえる習慣がつきつつある。

ウ　地域全体をみる「防災」を考えようとしてきた。また、地域のよさを含めて、地域をどうしていくことがよいことかを考えることもできるようになった。

エ　災害時に、どう「判断」すべきかの自分なりの考えを持つようになった。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

ア　教師自身の防災意識と、災害時、児童をどう守るかという「危機管理意識」の高まりがあった。

イ　自分の家庭をどう守るかといった具体的な考えがでてきた。

ウ　自治会や、公民館、防災士協議会が連携して、防災の取組をしようとする様子が出てきた。

5）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

ア　問題解決学習（「プロジェクト学習とポートフォリオ」の活用・・・鈴木敏恵の助言と指導）の活用

イ　イメージ力を育てる「避難シミュレーションシート」の活用

ウ　学校・地域との連携した取組・・・「市民一斉避難訓練」「タウンウォッチング」等と総合的な学習の時間の活動とのコラボレーション

エ　地域や家庭へのプレゼンテーションと啓発（成果物「凝縮」・・「防災ブック」の作成と配布）

6）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

ア　防災教育は、学校と地域がコラボレーションした形で行うことが必要である。

イ　市行政等と、連携をしていくべきである。

ウ　防災教育の全体計画や指導計画などの整備が必要である。

7）その他（※特にあれば記述）

ア　学校教育の中で、「防災教育科」とか「リスク教育科」のようなものが必要ではないだろうか。たくさんの時数はいらないが、教育課程に位置づけることが必要に思われる。

学校名	気仙沼市立階上中学校
担当教員名	千葉　孝

活動のテーマ	私たちは未来の防災戦士
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間　）　　参加生徒（　全学年　　１２１名）
実践期間	平成２６年４月８日　～　平成２６年１２月１９日
想定する災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 (地震)・(津波)・ 台風 ・ 洪水 ・ 河川氾濫 ・ 土砂 ・ その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

去る東日本大震災時にも、本校で防災学習を学んだ高校生が、避難所となった本校にいち早く駆け付け、初期対応に尽力した。今後、将来において、階上地区だけではなく、災害時どこにいても瞬時に判断をし、適切に対応できることが大切である。本校では、防災に関する“知識”を学び、“技能”を修得し、“行動力”を育成することで、災害時に自ら適切な判断し、行動できる人材を育成することを目的としている。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール

①防災学習その１　　９月２５日（木）午後実施

３年間をとおして、災害時に必要な対応「自助」、「共助」、「公助」について学習する。今年度は「自助」をテーマとし、災害時の情報収集の方法を学習したほか、地域の消防団の指導の下、規律訓練、放水訓練、伝達訓練、搬送訓練等を実施し、その技能を身に付けた。

［軽可搬ポンプによる放水訓練］

②防災学習その２＜各学年毎体験活動＞　　９月１９日（金）実施

１年……地震、津波のメカニズムについて学ぶ。

２年……応急手当、心肺蘇生法、ＡＥＤの使い方について学ぶ。

３年……小学校への防災啓発活動（防災紙芝居、防災カルタ）の実施。

［高校教諭による講話（１年）］

［応急手当の研修（２年）］

［小学生対象の防災カルタ（３年）］

③防災学習その３＜地域と連携した活動＞

ア　階上地区防災教育推進委員会の設置（３回の会議を実施7/8、9/24、12/18）

……　地域と合同で取り組む避難訓練の企画

イ　自治会との合同防災訓練　　１１月８日（土）午前実施　……　小中学校を授業日とし、自治会が設定した第１次避難場所へ家族で移動した。移動後は各自治会で自治会毎に工夫を凝らした研修に参加。

ウ　中学生だけによる避難所設営訓練　１１月８日（土）午後実施 ……　小学６年生と中学生が、生徒会執行部指示のもと中学校体育館に避難所を設営する訓練。小学５年生以下は、避難者として参加。地域住民はその様子を見学し、休日や夜間に避難所を設営することがあった場合に備える。

［ア：防災教育推進委員会］

［イ：家族で一次避難場所へ］

［ウ：避難所設営訓練］

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで(助成金を受ける前)の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

今回の助成を受けて、非常持出袋やプレゼン用ミニ黒板、講師の依頼等有効活用ができ、各々内容の充実が図られた。また、９月の研修会をとおして、地域性の違いによる防災学習への取り組み内容が異なることなどが分かった。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

生徒の視点での考えを重視するとともに、自分たちの力で取り組む姿勢を大事にした。活動終了後には必ず振り返りをし、成果と課題を確認し合い、次時の活動に生かすようにした。また、生徒が学校にいる時間よりも家庭や地域にいる時間が長いことから、地域との連携を大切に考え、学校防災から地域防災へと視点を変え、地域と連携した防災学習を取り入れた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

いざという時の情報収集能力とそれに対する判断力、協力して取り組む態度などが培われた。その成果として、下校途中の生徒が民家の小火を発見し、消防署に通報した後、近所の人たちに声をかけ、バケツリレーによる消火活動で延焼を防いだ等の例もある。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

震災直後の生徒たちの行動力を見て、地域住民も防災学習の必要性を感じたことから、自治会長と学校、行政機関等からなる階上地区防災教育推進委員会が立ち上がるなど、地域における防災・減災に対する取り組み意識が高くなってきている。

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

東日本大震災を受けて、「自助」をベースにおいた防災学習の内容を重視した。そのためには、地震や津波に関する基礎知識を身に付けるとともに、それに対する普段からの備え、実践をとおして、いざというときに行動できる力を育成することをねらいとした結果、その他の災害（暴風雨、雷、火災等）にも対応できるようになってきた。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

これまでの活動を継続・継承するとともに、被災地における復旧工事で地形も変化しつつあることから、常に最新情報を入手し、それに対応した防災学習内容の改善が必要である。

７）その他（※特にあれば記述）

東日本大震災後には、本校に多くの学校から多大な御支援をいただいたことに対し、御礼の意味を踏まえて本校防災学習の取り組みを発信するとともに、交流活動を行うことで、さらにブラッシュアップした防災学習にしたいと考えている。

学校名	仙台市立南吉成中学校
担当教員名	高橋　教義

活動のテーマ	中学生と地域が協働する防災教育　－多様な減災・防災の体験的活動を通じて－
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間　）参加生徒（　学年　小学６・中学１～３年生　３８２名）
実践期間	平成２６年　６月　　～　　平成２６年１２月
想定する災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　全ての自然災害を想定　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

本校の教育実践では、大震災の被災者の話を聞き、被災地を視察して復興支援活動と被災者との交流を深めることで大震災の教訓を学ぶとともに、減災・防災の知識とスキルを取得してそれらを活用できる実践力を培う。そして、“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へ、心と姿勢の変容を図り、豊かな人間性を育む。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

実践のねらい	実　践　概　要	時期
①震災と教訓を学ぶ ②復興を知る、支援する	○津波被災農家の方々による講演会 ○津波被災農家に弟子入り体験･･･津波被災地を視察し、稲作から綿花栽培を行っている畑で除草作業を支援 ○仙台七夕祭で清掃奉仕活動･･･会場等でゴミ回収等	７月上旬・全校生徒 ７月下旬・全校生徒 ８月上旬・約70人
③減災・防災の知識、スキル、行動を習得する	○校内・炊き出し調理コンテスト ○防災教育課題のテーマ別学習･･･１０テーマで調査等 ○生徒が主導する地域防災訓練･･･３年生が６班に分かれ、避難者役として小６と中１・２、住民等が参加	１０月上旬・１年生 １０月上旬～３年生 １１月１４日 計630人が参加
④実践を発信する	○ユネスコスクール東北大会にて生徒会が成果発表 東北各県の教員等が集う研究会で生徒が実践を発信 ○その他、ボランティアスピリット賞に受賞参加・発信	１０月中旬 １１月下旬
⑤実践を評価する	○学校内でのPDCA自己評価と学校関係者評価 ○外部・第三者評価：教育研究会等への公表による評価	１１月～

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで(助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

本校の教育実践「生徒が主導する地域防災訓練」では、総参加者数が昨年が550人から今年が630人と増加しており、炊き出し調理の食数が増えたことで、調理する生徒数と調理時間が限られている中で、増えた分量を短時間で調理するため、校舎外部に設置するかまどを製作して熱効率と分量増に対応することができた。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

本校では、実践内容に示した取組において、生徒に四件尺度法による質問紙調査やレポート作成を実施している。レポート作成は津波被災農家弟子入り体験で行っており、生徒はレポートを書き、保護者が読んでコメント欄に記入後に学校に提出している。このように本校の教育活動では、教員だけでなく生徒や保護者から量的・質的に評価をいただき、成果や効果の検証と改善を図っている。また、地域と連携する実践においては、住民の視点からも評価をいただくためにアンケート調査と学校関係者による評価活動も実施している。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

生徒が主導する地域防災訓練では、生徒会が指導的立場となって中学３年生約100人が避難所設営・運営、集団避難の誘導、炊き出し調理、救急救護、災害状況・収集、対策本部の６班に分かれて活動し、避難者役として小６、中１・２年生と住民等の500人を超える人々が参加する。この実践から３年生は、これまでに学んだ知識とスキルを活用して実行する力を培い、“支えられる人”から“支える人”へと心と姿勢の変容を図ることができている。このことは、アンケート調査で、３年生が選択肢“大いに”を選択した割合が「この訓練は地域防災に貢献できる」80.4%、「生徒が訓練したり協力したりすることは必要」81.4%、「この訓練などの防災教育は大切だ」84.5%であり、選択肢“まあまあ”を加えると16調査項目の全てが９割を超え、自己肯定感を含む心的変化から確かめられる。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

町内会や婦人会、老人クラブ、消防団、PTAなど１８の地域組織が学校・地域支援組織「チームＭＹ・ＳＰ」を昨年度に設立して、学校と地域の相互支援を行っている。地域の防災力の向上や安全・安心な地域作りは、学校と地域の共通する課題であることから、両者が連携・協働することは極めて重要な視点である。本校の地域防災訓練では、この視点に基づきＭＹ・ＳＰが３年生の６つの活動班を分担して補佐・支援する組織的体制を整えて実践しており、両者の教育的成果や効果を高めることができるものと考えている。

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

毎年、生徒が主導する地域防災訓練を実施することは、地域防災を担うことができる生徒を誕生させることになり、実行力を培った卒業生が年々増えることで確実に地域防災力を高めることにつながる。また、中学生と住民が関わる教育実践を行うことは、年代を超えた協力体制と繋がりを生む機会を設けることになり、安全・安心な地域作りに波及する可能性も高まる。さらには、このような教育実践を担当する教員が転任しても、この訓練を指導的立場で関わっている生徒会と支援組織ＭＹ・ＳＰが実践を継続することができるとともに、学校の休業日や夜間の訓練についても実施の可能性を高め、実践内容の拡充を図ることもできると考える。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

中学生は“助けられる人、支えられる人”から“助ける人、支える人”になる教育実践をすることにより、大いに心の成長を促すことができる。実践内容で示した津波被災農家に弟子入り体験のアンケート調査では、選択肢“大いに”を選択した３年生が「人を助けることは大切」83.5%、「人を助け、支え合っていきたい」84.8%、「夢や希望を持ち続け、頑張りたい」83.5%であり、３年間の調査からは１年時の結果より高まりを見せている。このことにより、中学生には“助ける人、支える人”になれる教育実践が重要かつ必要と考える。しかし、ここに示した調査項目の割合が100%にならないことは課題と捉える必要があり、全ての生徒が「人が人を助けたり、支えたりすることが当たり前である」と“大いに”思い感じられる教育実践に改善しなければならない。

７）その他：　本校は、平成２５・２６年度に防災教育チャレンジプラン（主催・同実行委員会、内閣府(防災担当)）に２カ年採択され、支援と助言をいただき教育実践の拡充に挑んでいる。

学校名	大田区立大森第六中学校
担当教員名	五十嵐　文

活動のテーマ	地域とともに進める防災教育　～つながりを大切に　できることを行動に～
主な教科領域等	教科領域（　　総合的な学習　　）参加生徒（1 ・2・ 3学年　３６２名）
実践期間	平成　２６年　　４月　２６日（土）～　　平成　２７　年　３　月　２５　日
想定する災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 (地震)・ 津波 ・ 台風 ・ 洪水 ・ 河川氾濫 ・ 土砂 ・ その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

首都直下型地震が近い将来起こると言われている。東日本大震災では自然の圧倒的な力の前に、人間の無力さも十分に味わった。しかしその中で人々が協力し、知恵を出し合い乗り越えていくことができることも知ることができた。中学生にとってこれからの人生の中で自然災害だけでなく様々な大きな壁があるはずだが、社会の中で自分ができることを一生懸命やり、人と協力し力を合わせることで人の役に立つ喜びや自分自身の成長を促すことになる。防災という命を守る人間として一番大切なことに取組ことで、社会の一員としての自覚を養うことを目的とした。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

４月２６日（土）総合防災訓練

１・２年生　首都直下型地震が発生したと想定。保護者への引き渡し訓練。

３年生　学校防災訓練・・・発災直後５時間を想定し、９班に分かれ仮設トイレ・テント設置・発電機投光器の操作・ストレッチャーでの怪我人搬送・備蓄倉庫の物資運搬・避難者への対応・トイレ用水のバケツリレー・アルファ化米の炊き出しと配布・災害電話設置・初期消火B・C・D級ポンプで放水訓練

７月７日（月）2年生　まちなか点検　2年生120名が参加をした、今年度新たに始めた取組である。

目的：自分たちの住む地域を大田区防災課、自治会、消防署、消防団の方と歩き、集めた情報をマップにまとめることにより防災の視点で町を知るきっかけを作る。また地域の方と共にこの活動に取り組むことで地域の方に学び､将来の地域の担い手の成長につなげることを目的とする。

方法：自治会ごとに生徒と地域の方が一緒にまちを歩き、防災の視点で町を点検する。自治会の方、大田区防災課、消防署、消防団、大学生のボランティアで、１班１０名ほどのグループを作る。１時間ほど地域を歩き、消火器、消火栓、AED設置場所、避難できる広い駐車場など災害時に役に立つことと、狭い道路、崩れそうなブロック塀、急な階段などの危険箇所など、町の災害における強みと弱みについての情報をカメラで記録し、メモをとる。学校に戻ってきてから、撮ってきた写真をプリントアウトし、地域の強みと弱みに関する情報を、地図の中に書き込みをしてまとめる。できあがったマップを使い、自治会ごとにリーダーの生徒がまとめたことを発表する。防災のマップは、自治会の集まりの時に地域の方に見てもらって今後に役立ててもらう。

９月１０日（水）３年生　「普通救命講習」受講　救命技能認定を受ける

９月１５～１７日　アクサユネスコ協会減災教育プログラム　教員研修会に2名の教員が参加

１０月３日　１年生　社会科見学　東京臨海広域防災公園そなエリアで防災体験学習　「７２時間どう生き残るか？」体験を通して学習する。

１０月７日　２年生　社会科見学　本所防災館で防災体験　　暴風雨体験・消火体験・煙体験・阪神淡路大震災の地震体験・東日本大震災の防災映像の体験学習を通し、防災の知識を深める。

３月7日　学習成果発表会において各学年の取組を発表した。

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

９月の研修後、教員向けと生徒向け別々にパワーポイントを作成し、研修報告をした。東日本大震災の現状を知り防災に対する意識が変わったと思う。生徒も避難訓練や日頃の意識の大切さを知り、訓練における真剣さが増した。助成金は「スミスライト」を購入し、いつでもだれでも使用できるように職員室に設置した。また近隣の夜間訓練や大田区防災課にも貸し出しを行なっている。Ｈ２７年５月に行われる学校防災訓練では体育館の避難所で使用予定である。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

鹿折中学校の防災の取組を聞き、生徒が中心になって動く訓練の必要性を感じた。毎年３年生が避難所開設訓練を行うが、Ｈ２７年５月の訓練に向けて現在の２年生が主体的に動けるように準備を進めている。各班のリーダー、サブリーダーを生徒会と学級委員、各委員長で組織し、その中から全体の長を決め伝達や連絡など今まで教員がやっていたことを生徒ができるような組織にする予定である。また今までは３年生のみの参加であったが、来年後輩がそれをつなげられるように２年生の代表の参加を考えている。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

本校の取組は全て生徒が主体的に動くことを目標としている。地域の方の協力はもちろん欠かせないものであるが、全生徒が自分の係をしっかりやることで責任感が芽生え、また終わったときに達成感が生まれる。たとえば学校防災訓練では、炊き出し班、仮設トイレ班、災害電話設置班､避難所班、地域活動班などの班に分かれるが、その中で全員が一生懸命自分たちの任された仕事を自主的に取り組む。今年度始めたまちなか点検も、生徒はリーダー、サブリーダー、カメラ係、記録係と仕事が分担されているので、任されたことをまず責任を持って行うが、それだけではなくお互いに協力し合って、みんなで一つのものを作りあげようという雰囲気がある。それはいままで積み上げてきたものがあり、先輩から後輩へ確実に受け継がれているからである。２年生になれば、これをやる、３年生になったらこれをやる、生徒達の中に先輩が行ってきたことを引き継がなければならないという気持ちが強い。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

本校では防災に関する取組だけでなく２年生の職場体験、学区域にある大岡山駅前花壇のボランティア、地域の祭りへの参加、本校に隣接する洗足池の環境を考えたホタル復活プロジェクトなど、地域とのつながりがなくてはできない取り組みが多い。防災の面でも学校防災訓練に加え、今年度新たに取り組んだまちなか点検は､地域の人と一緒に自分たちの町を歩くことで様々な情報を集める内容だが、まさに地域と共に行った取組だと思う。地域の方も初めは学校防災訓練では、どのように関わったらよいのか手探り状態であったが回数を重ねていったり、今年度初めての試みであるまちなか点検で約１時間生徒と一緒に歩くことでコミュニケーションをとり、つながりをより一層深めることになった。防災訓練の参加者も年々増えている。

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

本格的に防災学習を始めて５年目を迎えるが、毎年新しいことを取り入れながら中学校３年間の大きな流れが整った。１年生では｢そなエリア」の社会科見学、２年生では「本所防災館」での体験学習と、地域の方と行う「まちなか点検」、３年生で学校が避難所になったことを想定した「学校防災訓練」と「普通救命講習」受講。このように３年間を通し徐々に、より実際の災害時の状況に近くなり、役立つ内容を段階的に学習できるような流れになっている。学年ごとに防災に関する取組が確立していると、教員のメンバーが替わっても継続して行うことができる。資料・情報は必ず共有のものとし、いつでも見ることができるようにする。同じことを繰り返すだけでは発展性がないので、一つの取り組みが終わったら必ず振り返りを行い、来年度に申し送りと改善点を伝えるようにする。このように各学年で体験することがはっきりしていると、生徒も来年はこれをやるという意識が生まれる。また今の学年で取り組んでいることが、どのように来年つながってくるのかということを考えながら取り組むと心構えも違ってくる。この５年間で中学校３年間の防災学習が系統だって確立し、全校体制が整った。今後はさらに内容を充実させることができるように改善していく。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

今後は、様々な状況を想定した避難訓練の実施、教員の動きの訓練、生徒の企画・立案からの参加、1・2年生や小学生を含めさらに地域が参加する避難所開設訓練の推進、HUG体験・クロスロード体験などの新しい取組の実施を課題とした。

学校名	多摩市立東愛宕中学校
担当教員名	竹田　和彦

活動のテーマ	ユネスコスクールとしての災害安全教育の充実に向けて
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間．特別活動．学校行事　）参加生徒（　全学年　１５６名）
実践期間	平成２６年　４月　１日　　～　　平成２７年　３月３１日
想定する災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震 ・ 津波 ・ 台風 ・ 洪水 ・ 河川氾濫 ・ 土砂 ・ その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

東京都にあって、少子高齢化の進んだ地域であるが、一方で生徒それぞれの自助の力と地域から期待される共助の力を高めて、ESDの視点に立った継続性ある取り組みを、防災・減災の両面から追究して、広くその成果を伝えていく。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

① 防災自助パックを活用した思考力や判断力の育成　[通年]
② 防災・減災宿泊キャンプによる自助能力の伸長　[平成26年7月18～19日]
③ 被災地の実際や、そこでの経験を知り、自らの活動に活かす実践　[平成26年10月27日]
④ 意図的で多様な避難訓練の開発や、サバイバルカードの開発と活用　[通年]
⑤ 地域の防災に資する活動場面の開発と実践　[平成26年10月19日]
⑥ 企業やNPOと連携したボランティア活動や防災・減災教育　[平成26年7月18日]
⑦ Twitterの活用による帰宅困難抑制への対応と具体化　[通年]

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

① 被災地の住民及び中学生（校）（宮城県気仙沼市立大谷中学校）との交流。
② 防災自助パックを活用した思考力や判断力の育成。
③ サバイバルカードの開発と活用。
④ ESDの視点を重視した防災・減災教育の体系的整備。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

東日本大震災以降、本校では毎年、防災・減災宿泊キャンプを地域と連携して実施している。本プログラムに参加したことによって、防災・減災宿泊キャンプの必要性が、より意味あるものと捉えることができた。特に、少子高齢化の進んだ本校地域で、地域の担い手となる中学生が、避難所運営訓練の経験を積むことに大きな意味があることを、宮城県気仙沼市立階上中学校の生徒の体験談から得ることができた。今後もその体験談から内容を精錬し、より有効な防災・減災宿泊キャンプの実施に臨む。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

本プログラムの支援や研修の成果として、東日本大震災の被災地の中学校とWebカメラを活用した交流によって、被災した同年代の生徒による実体験談から学ぶことができた。

被災地の中学校では、中学生が避難所運営に関わらざるを得ない状況下で、中学生が果たした実践や苦労等の意見交換をとおして、自助と共助に対する意識を高めた。また、自分たちが住む地域での防災・減災について、どのように関わっていくべきかを授業をとおして具体的に考え、防災自助パックやサバイバルカードの作成を意欲的に行なった。

防災学習をご視察される　下村　博文　文部科学大臣

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

防災自助パックの取り組みは、家庭（保護者）を巻き込む形で進めていった。このことが、家庭の防災意識をさらに高めることにつながったと共に、避難訓練にシェイクアウト訓練を導入し、地域や保護者、さらには保護者の職場における同時訓練の実施依頼を行い、地域での防災・減災意識を高めるきっかけとなっている。

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

本校では、生徒の学年に応じた自助から共助への意識を高める学習を行ないながら、共助のために基本となる自助能力の必要性を考える指導を行なった。

また、運動会には防災・減災種目を取り入れ、地元消防団による表彰なども行なった。これらの防災・減災教育によって、生徒の避難訓練に臨む意識と態度が大いに向上した。

防災・減災種目を取り入れた運動会（簡易担架による搬送訓練）

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

本校の防災・減災教育の実施により、生徒の意識は実施前に比べ大幅に向上した。その背景として、これまでは指導者側の一般論による知識からの指導であったものから、今年度は東日本大震災の被災地からの実体験及び教訓を学んだ上で指導したことがあげられる。今後は、より一層防災・減災意識を家庭や地域教育力に結び付けていくことが課題の一つである。今後も『2050年の大人づくり』の実現を目指していく。

学校名	岡崎市立竜南中学校
担当教員名	森田　淳一

活動のテーマ	地域とともにいのちを守る「竜南いのち守り隊」
主な教科領域等	教科領域（　　総合的な学習の時間・社会科　　）参加生徒（　第３学年　　２００名　）
実践期間	平成２６年　　５月　　９日　　～　　平成　　２７年　　２月　２０日
想定する災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 (地震)・ 津波 ・ 台風 ・ 洪水 ・ 河川氾濫 ・ 土砂 ・ その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

本校では、中学校３年生において、「いのち」をテーマに研究活動に取り組んできた。その中で、地震等の災害に対する切実感から、「いのちを守るために」という命題が生まれ、学習テーマを「竜南いのち守り隊」と題して、地域力の向上と子どもたちの防災・減災意識の向上に向けた活動に取り組むことにした。その目的は、以下に示すとおりである。

防災学習を通して、地域に参画していくことで、郷土への愛着を育てる。

災害発生時に、地域において中学生ができることは何があるかを考え、実行できる力を育てる。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

①「つかむ」段階　　防災講話　防災オリエンテーション　NPOとの協働　等

→岡崎市役所やＥＳＤ－Ｊ、地域交流施設等との協働による学びで、防災意識高揚

②「さぐる」段階　　修学旅行とコラボした防災学習　防災マップ作成　非常持出袋検討　等

→高揚した意識を一斉学習による探究で「個別の課題」へと高める

③「深める」段階　　東北訪問交流　地域防災訓練への運営側参加

ESD子ども会議参加　　教師との協働学習　等

→個別の課題を解決するための多様な防災学習を実現し、学びを深める。

④「ひろめる」段階　　防災フェスタの開催　等　→　共有化による地域への貢献

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

①１教師１チャレンジの導入

気仙沼市で学ばせていただいた防災エッセンスを、本校の教職員なりに解釈し、子どもたちとともに、教師の特性に合わせた防災学習を構築していくことができた。

☆体育教師→消防とコラボした救命講習実施　　☆美術教師→防災かるた・手ぬぐい制作

②地域への広がり

学びを地域へ広げ、子どもたちの活動の幅を広げることができるようになった。

☆防災見守り隊結成・・・地域の独居高齢者の方と意見交換をし、共助を学ぶ。

☆ＥＳＤあいち・なごや子ども会議リーダー・・・防災グループのリーダーとして会議を総括し、ユネスコ世界会議で各国閣僚に思いを伝えた。

③東北訪問の継続

東北を子どもたちが実際に訪れることで、切実感ある防災意識へと高めることができた。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

今年度の防災教育では、１教師１チャレンジを取り入れたことで、学びに多様性が生まれ、教師は自分の得意分野を取り入れた学びを構築することで、教師としての資質向上に努めることができた。子どもたちも、より楽しみながら防災を学ぶことができるようになり、積極性を生み出すことができた。また、この中で地域との連携を取りながら活動をする「防災見守り隊」も組織され、地域に根差した学びへと深化することができた。

これらの学びの成果を発表する場を、学校内外において多くいただくことができるようになったことで、「広める」という視点からも、地域の評価をいただくことができるようになった。これにより、学びの実践→発信→地域からの評価→地域との連携という、好循環をもたらすことができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

生徒の変容については、次の感想文が如実に変容を示している。概念的な部分から、現実的な部分を見取ることができるようになり、「実際に自分ができることは何があるのか」を考えて行動することができるようになったとともに、地域への貢献（自助・共助）を心に抱き、「持続可能な地域づくり」への参加をめざすことができるようになった。

防災講話において，市役所の方から東日本大震災の実態を学ぶ	こんなにも大きくて，長い地震が来たら，パニックになってしまうと思った。見せていただいた映像の中で，**お年寄りがしゃがんでいる所を，若い人が背中をさすっていたから，自分もそんな人になりたい**と思った。
東北復興支援訪問において，津波被災農家・同じ中学生・岡崎市派遣職員等から復興の実際を学ぶ	農家の方の苦労と努力はすごいものでした。周りの方々と協力して，がれきで埋まってしまった畑からがれきを取り除き栽培できる土に戻しました。 今年で３年目のトマト栽培ですが，まだまだ改善させるところがあるそうで，**懸命な復興**をなさっていました。 農家の方がおっしゃっていた「**また何年後かには必ずイチゴを栽培できるようにする**」という言葉から，**輝き**を感じました。
竜南総合防災会議にむけて，公助に関わる様々な立場の方（水道局・電力会社・ガス会社等）から災害発生時の努力の姿勢を学ぶ	防災倉庫の中にあるものも少なくて，多くの人が避難所に行くと全然足りないから，自分たちで持っていったり，なるべく家にいたりした方がいいと思った。**もっと自分たちで用意をしないといけないことを知ってもらう必要がある**と思う。
竜南総合防災会議において、「私たちができること」についての意見共有を図る	この話し合いで多くの意見が出たけれど，みんなの意見を聞いたら，学区は安全なのかもっとわからなくなってしまった。みんなそれぞれの立場の人たちががんばってくれている。けれど，やっぱりできないこともあって，いい所もあれば，不安なところもある。でも，どの話を聞いても，自分の身は自分で守るということがあった。**すべての人を助けることはできないから，自分でどうにかしないといけない**ということを**改めて感じた**。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

「連携」を模索し、活動を進めた。学区の団体はもちろん、ＮＰＯや他校との協力をしながら活動を進めることができた。その中で、つながりが新たなつながりを生み出し、協力関係を築くことができたことはとても大きい。このつながりを持続可能なものにしていくことが必要であることを改めて実感した。

5）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

学びのまとめの一つを、『手ぬぐい』の形にしたことで、ちょっとうれしい防災グッズとなるとともに、使ってもらえる学びの成果とすることができた。

6）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

防災学習を一過性の者にするのではなく、次の世代につなげていくこと。子どもたちが得た学びを地域で活用し、地域力をいかに高めていくかが大きな課題となる。その実現には、地域連携のさらなる充実がある。

学校名	有田市立初島中学校
担当教員名	出口悦子

活動のテーマ	地域・地元企業等と連携した実践的な防災・減災教育
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間、特別活動、道徳の時間等）参加生徒（　全学年　５３　名）
実践期間	平成　２６　年　４　月　８　日　　～　　平成　２６　年　１２　月　２４　日
想定する災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 (地震)・(津波)・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

①、大地震や津波のメカニズムについての科学的知識・理解と、地震・津波から身を守るために必要な知識・技能を確実に習得する。

②、大地震・津波から身を守るための技能、災害発生後の混乱の中で共に生き残る技能を、各種の具体的訓練を通して確実に身につける。

③、生命尊重、思いやり、助け合い、社会貢献、多様性理解等関連する価値の習得に努める。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

「１、活動のねらい」の中で記述した①～③のポイントについては、概ね以下のような実践、活動の中で取り組んだ。

①について

理科、社会科、総合的な学習の時間等の年間指導計画の中に位置づけ、それぞれの学習を通して身につける。また、外部有識者を招いた防災・減災教育講演会を実施し、外部講師による指導の下でＰＴＡと連携した学習を実施した。また、校区や近隣地域で開催される防災・減災教育講演会にも、教職員、保護者の積極的な参加を促した。

②について

特別活動の分野を中心として、地域、ＰＴＡ、関係各機関、地元企業等と連携しながら取り組む。（本年度実施内容は概ね以下の通りである。）

Ａ、地震・津波避難訓練（４月と10月の２回）

Ｂ、地元企業（東燃ゼネラル工業）に協力いただいた消防訓練

Ｃ、災害発生後の混乱の中で共に生き残るための技能を身につけるための各種訓練

毎年、１０月～１２月を中心にＰＴＡ、関係各機関と連携し多様な実習・訓練を実施している。実施内容は年により異なるが、今年度、次のような訓練を実施した。

・和歌山県総合防災課の協力を得た家具転倒防止金具取り付け等訓練

・体育館避難所設営訓練（パーティション組立・設営訓練）

・有田市社会福祉協議会や地元福祉施設の協力を得た認知症理解、身体の不自由な高齢者対応講習、実習。

※なお、有田市消防署の協力を得た救急救命訓練（ＡＥＤ使　用訓練、人工呼吸・心臓　マッサージ訓練）は毎年２月に３年生を対象に、保健体育の授業で実施している。

③について

道徳の時間や、総合的な学習の時間、特別活動を中心に学校教育活動全体を通じて行っている。特に本校では近年、次のようなボランティア活動や地域との交流活動に力を入れている。

ア、毎学期１回程度の地域清掃活動　イ、毎週１回の駅前清掃＆挨拶運動
ウ、各種学校行事への地域や市内のお年寄り等の招待活動
エ、本校生徒により編成された「初中ソーラン組」による地域行事・イベントへの参加活動
オ、生徒、保護者合同での東日本大震災復興支援募金活動

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・今まで、本校の防災・減災教育は地震・津波対応に限定した取組であったが、地域の特性等を踏まえ、より幅広い現実的な視点を持てるようになりつつある。
・防災・減災教育や災害対応に必要な物資、機器等の購入、講演会の講師招聘が円滑に実施できた。

４）実践の成果
①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から
・今まで、各教科・領域で個々に取り組んでいた各活動を、活動テーマの下に見直し、精選、充実、関連付けを図ることで、防災・減災教育の充実を図ることができた。
②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。
・地域防災の担い手としての意識や知識・技能は確実に高まってきている。また、その背景としての生命尊重、思いやり、助け合い、社会貢献、多様性理解等の精神も確実に身についてきている。
・地域の多様な人々との交流を通し、郷土を愛する心やコミュニケーション能力が育ちつつある。また、生徒達に自主性、自発性、責任感等が付き、学校教育活動全体にプラスの効果が現れるようになった。
③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から
・地域住民、企業、関係各機関等に協力いただいた活動を繰り返し実施することで、活動の質的充実が図られるとともに、支援体制もより強固なものとなってきた。
・各活動実施においては、毎回ＰＴＡにも参加・協力いただくため、保護者の防・減災についての意識の向上にもつながってきている。

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点
・保護者、地域住民、地元企業と連携した防災・減災教育の推進を重視し、教育内容の質的向上に努めている。中でも、地元にある石油精製工場（東燃ゼネラル和歌山工場）との連携は、実践的な防災・減災教育の推進に大変効果的な取組となっている。
・防災・減災教育推進の中で、保護者、地域住民、地元企業との積極的な連携を進めたことで、関係各機関側から関係各機関主催の活動への本校生徒達への協力依頼も来るようになる等、地域社会との連携が一層強固になってきている。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望
・防災・減災運動を進める中で、地域住民、企業、関係各機関等との連携協力は活発に行われるようになっているが、その中で、校区を同じくする小学校との連携協力がまだ十分でない。
・様々な活動をするため、資材を購入するため、指導者等を招聘するための継続的な資金の確保が必要である。
・今後更に取組を充実させていくための、新たな活動内容の開発と連携先の開拓が必要である。
・今後更に取組の充実を図るための教職員、保護者、地域住民、企業等との共通理解促進が必要である。

学校名	広島市立戸山中学校
担当教員名	村田　吉弘

活動のテーマ	「学校における安全・安心づくりのために主体的に行動する生徒の育成」
主な教科領域等	教科領域（　　総合的な学習　　）参加生徒（　　全学年　６０　　名）
実践期間	平成２６年４月１日　　～　　平成２７年３月３１日
想定する災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（　　クマ学習　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

生徒や教職員を対象にした防災教育としての救命救急講習や避難訓練などを実施し、「学校における安全・安心づくり」の意識を高めるとともに、地域の防災マップの作製や「ツキノワグマ学習会」の実施 、高齢者疑似体験学習・介護体験学習などの実施を行い、生徒会自主防災活動を通じて生徒自らの命を守りぬく力を育成する。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

４月下旬	6月下旬	7月上・下旬	9月中旬	10月上旬	12月中旬	2月中旬	3月上・中旬
○火災対応・避難訓練	○老健福祉施設訪問及び介護支援学習	○救命救急法Ｗｅｂ講習実施・救命救急法実技講習 ○ツキノワグマ学習会開催 ○不審者対応・避難訓練	○地震対応・避難訓練	○火災対応・避難訓練	○生徒会自主防災研修 ○日本赤十字の高齢者疑似体験及び防災研修	○防災家庭学習（防災検定事前指導）	○ジュニア防災検定の実施 ○防災マップの作製

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

9月の研修で本校養護教諭から『鹿折中学校を訪問させていただいたとき、生徒会が中心となった防災教育をされていたことが印象に残った』との報告を受けた。本校においても昨年度より生徒会執行部を中心とした自主防災組織を立ち上げていたことから、今年度は、防災教育においても生徒会を中心に取り組むようにした。例えば、日本赤十字広島支社による高齢者疑似体験学習や避難時介護支援などの防災研修を生徒会が中心に行い、災害に必要とされる行動を考える機会も増え、生徒や教職員の災害に対する危機意識が高まった。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

昨年度に引き続き防災教育を行ってきたが、今年度は、特に、中学生が主体となり高齢者に手をさしのべ、地域社会の一員として地域の方々を助けることができる生徒の育成を目指した結果、生徒会自主防災組織を中

心とした活動を計画立案することができた。今後は、小学校との連携と組織分担の改善を図りたい。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

実際に高齢者疑似体験を行うことで「身体が思うように動かなくなることが分かった」「高齢者の手助けをしたいと思う」などの生徒の感想が聞かれ、災害時の避難所における高齢者の身体の不自由さを知り、声のかけ方・手の差し伸べ方等を知ることができた。また、「自助」の大切さも学べた1年でもあり、救命救急講習での学習をもとに家庭でも災害時の対応を話し合ってみたり、避難バッグを作ってみたりする生徒もいた。加えて、昨年8月に広島市で大規模な土砂災害があり、災害の危険が身近であったためか、防災教育を実施するにあたっては“もしも“のことを考えながら学ぶことができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

救命救急講習にあたっては、生徒だけでなく教職員も一緒に受講し、普通救命講習修了証を全員取得し、緊急時の救急スキルを身につけることができた。また、戸山地区自主防災会の指導を受けて、防災についての意見交換を行う機会が増えたことから、地域と連携しながらの避難訓練の持ち方の改善につながった。次年度には、近隣にある高齢者施設と共同しての地震対応・避難訓練を行うことを計画している。

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

本校では、できるだけ生徒会自主防災組織が主体となって活動できるように、これまでも取組を行ってきた。特に、生徒会執行部を中心として戸山地区自主防災会長の講義と演習を受講し、その結果、本校で行った防災教室の運営も生徒自らが前に出て、積極的に活動ができるようになった。また、戸山地区は後期高齢者の割合が住民の四分の一となっており、緊急時の支援を必要とする高齢者が多いため、高齢の方の不自由さや、気持ちについて知り、学校に避難所開設の折には具体的な介助や支援をすることができるように工夫もした。老人福祉施設も毎年、訪問しているが、日頃からの繋がりを大切にして、高齢の方との触れ合う中から普段の生活では気づけないことであっても、緊急時において支援できる力を養えたと思う。いざという時は、地域と協力して『自分たちが主体的に動くんだ』という気持ちを育むことができたと思う。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

救命救急講習や避難訓練などは何度も繰り返して行い、緊急時でも適切に素早く対応できるようにすることが大切であると学んだ。生徒の感想の中には、「いざという時は習ったことを生かしたいが、実際にできるか不安です」という意見もみられたが、災害が起こったときは「自助」を優先しながらも、支援を必要とされるときには行動できるように、自信が付くまで何度でも研修していくことが大切だと感じた。また、危機意識が薄れないように定期的に防災教育を行っていく中で、マンネリ化しない工夫もしていきたい。

７）その他（※特にあれば記述）

防災についての取組を通し、地域の自主防災連合組織の支援で3月3日に1・2年生全員を対象に「ジュニア防災検定」を受検できるようになった。各家庭で防災について話し合った内容をレポートにしたうえで検定を受ける予定である。

学校名	岩手県立盛岡南高等学校
担当教員名	山下　佳子

活動のテーマ	「つづける　つなげる　つたえる」
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間　）参加生徒（１～３学年　７１２名）
実践期間	平成　２６年　１０月　　７日　　～　　平成　　年　　月　　日
想定する災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

風水害、火災などによる災害を想定した避難訓練を行い、緊急時に生命、身体を守るための適切かつ安全な避難行動を身に付ける。また、万が一の際の救護法を学び「自助」「共助」の取組を行い、実際の災害時には地域の防災リーダーとして「備え・考え・行動」できる人材の育成を目指す。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

【避難訓練】

10:20　緊急放送「記録的短時間大雨情報発令」

10:23　校長が生徒職員に避難指示、副校長が校内非常放送指示。
生徒避難　1年生は１階HRから２階ｶﾙﾁｬｰﾎｰﾙ、2～3年生は各ＨＲ避難、点呼、本部へ報告。

10:35　玉山区松川氾濫、盛岡市湯沢地区と矢巾町煙山地区に土石流が発生　同地区に住んでいる生徒招集。

【救護訓練】５～６校時

全校生徒第一体育館集合、アルファー米と保存水を説明。
各学年訓練場所へ移動。

・１年（第一体育館）心肺蘇生、AED　各クラス４グループ
・２年（ｶﾙﾁｬｰﾎｰﾙ）三角巾を使った包帯法
　二人一組の訓練と、各クラス４グループでの訓練。
・３年（第二体育館）担架と毛布を使用した搬送訓練
　各クラス４グループでの訓練。

終わった学年から第一体育館に戻り、アルファー米を試食。
各学年から代表が出て、ステージ上でデモンストレーション。

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

①９月の研修会で「ショート避難訓練」を知り、12月と1月に実施することができた。訓練後のアンケート自由記述にどうすれば身を守れるか、どのような訓練がいいのかということを書いた生徒が多く見られ、研修でお聞きした「やってみる」「できる！」「もっとやってみたい」という流れを作ることができた。
②日本赤十字社岩手県支部やNPO法人などとのつながりをつくることができた。
③助成金の活用で、アルファー米、保存水、アクリル毛布、三角巾を購入し、救護訓練を実施し、全校生徒が訓練を経験することができた。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

本校のこれまでの避難訓練はLHR がある日に、生徒は昼休みに逃げるための外靴を教室前廊下に用意し、LHR 前に外靴に履き替え、教室で担任から避難経路等の説明があった後に緊急放送が鳴り、避難をするという訓練のための訓練であったが、今年度は実際に想定される災害を設定した避難訓練を実施することができた。豪雨災害想定の避難訓

練は県内の高校では例がないということだったが、2013年度に近隣の市町村で豪雨災害があり、本校生徒も自宅に帰れない生徒もいたことから、想定し得る災害に備えた訓練は実施すべきであると感じた。また、実際の訓練では教職員の点呼や指示系統の問題点が明らかになり、次の訓練に生かすことができた。

救護訓練では、災害時に負傷者が出た際など、実際に活用できるよう心肺蘇生とAED、三角巾を使った包帯法、搬送訓練を行った。搬送訓練は担架がない場合も想定し毛布での搬送も体験し、身近な物を活用した救護方法を学ぶことができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

防災リーダーの３年生３名が中心となり避難訓練を企画した。実際の災害を想定して訓練を行うという、災害対応の力をこの生徒たちは身に付けることができた。他の生徒にも訓練の大切さを伝えることができ、訓練に真剣に取り組む生徒が増えた。抜き打ちでの訓練を繰り返したことにより、どこにいても自分の命は自分で守るという意識を持たせることができた。

救護訓練は赤十字社の方の指導の下、学年ごとに行った。各学年とも、地域においては自分たち高校生が避難所運営や防災のリーダーとなって動かなければならないという意識を持つことができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

日本赤十字社岩手県支部「知らないと何もできないが、一度でも訓練を体験すると、いざというときに身体を動かすことができる。一度訓練を体験して完璧にできるようになる訳ではないので、訓練を継続してほしい。」

本校養護教諭「最後にデモンストレーションを実施し、自分が体験しなかった訓練も見ることができ効果的だった。避難訓練は緊張感をもって行えた。訓練中、早退する生徒が保健室にいたので、緊急時の保健室休養者について考えるよい機会となった。」

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

全校生徒数が多く、全員が一度に全ての訓練を体験できないことから、学年ごとに分けて訓練を実施したが、最後にデモンストレーションの時間を設けたことで、全校で共有できるようにした。

日本赤十字社岩手県支部にご協力いただいたほか、避難訓練については、「学校防災アドバイザー派遣事業」を活用して９ 月９ 日に地域防災サポーター高橋主夫氏（元北上消防署勤務）と岩手県総合防災室防災危機管理担当の方が２名来校され、さまざまアドバイスをいただくなど、外部との連携で実施することができた。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

課題：

①指示系統マニュアルどおりに指示を出したり、職員の点呼をすることができなかった。

②学校に備蓄品がない。

③３年間を通じて全ての訓練ができるようにする。

④当初予定した避難所開設訓練が実施できなかった。

⑤避難訓練担当の総務課と復興防災担当との連携が上手くいかず、組織的に訓練を計画できなかった。

改善に向けた方策：

①訓練を繰り返し、その都度マニュアルを見直す。

②2015年度から１年生と３年生で備蓄品（食料、保存水）を購入し保管する。１年生で購入した物は３年次の訓練で消費、３年生で購入した物は卒業時に返却する。（2015年度のみ２年生も購入する。）

③JRCに加盟したので、毎年秋の避難訓練時に救護訓練も実施することにする。

④盛岡市に相談依頼したが協力を得られず断念した。今後は小中学校、地元自治体とも連携を図り、将来的には実施できるようにしていきたい。

⑤担当者との連携を図る。組織の見直しも含め検討する。

学校名	千葉県立市川昴高等学校
担当教員名	豊島　脩平

活動のテーマ	学校の周辺地域と水害を考える
主な教科領域等	教科領域（　　地学　　）参加生徒（　　３　学年　　７　名）
実践期間	平成　２６年　　９月　　１日　　～　　平成　　２７年　　３月　　２０日
想定する災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

本校は国分川と春木川という2本の河川が合流する地点に立地している。地質は主に湿潤な砂・泥層で、公社建設以前は湿地であった。大雨の際に河川は通常時よりもかなり増水し、堤防・河川の改修前は洪水・浸水の頻発地帯であったことが、本校の前身の市川西高校１０周年記念誌にも記されている。２０１３年１０月の台風による豪雨の際には春木川の氾濫により本校周辺地域が浸水し、海抜4.1mの正門付近も数10ｃｍの浸水となった。本校グラウンドも浸水しため池のような状況となった。そうした地域の特性をふまえ、特に水害のメカニズムと危険性について学ぶことで、防災・減災意識を高めることを目的とする。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

広島県安佐南区八木の土砂災害をもとに水系線の学習および地形図の読み取りについて学ぶ。

本校の地理的・地形的な立地条件への理解を深める。

・「市川市洪水ハザードマップ」「旧版地形図」を活用

雨量や河川の水位などのデータを調べ、収集する方法について学ぶ。

・「国土交通省　防災情報提供センター」を活用し、実際に調べてみる。

過去の水害のデータを読み取り、水害についてどのような対策が過去に行われてきたか知る。

旧版の土地利用図と現在のものを比較し、市川市全体で都市化がすすんだことを読み取る。都市型洪水のメカニズムについて学習し、近隣の水害について考える。

「市川市地震防災アプリ」を活用した地域巡検を行い、災害後の行動について学び、減災について考える。

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

ipadの活用により、地域巡検で外に出た際、言葉のみの説明ではなく、視覚的な展開ができた。また、地図の持ち出しが容易であった。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

共助や公助への視点を整えることで、生徒の自助を促進する手立てとなることを知り、必要な教育はそのための支援であることが分かった。

防災・減災教育は特別な取り組みのことだけを指すのではなく、地域に根付いていればいるほど、普段の授業の中あるいは、日常の中で、わずかでも減災の視点を持つことで減災教育として成り立つものである。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

水害のメカニズムを知り、その対策について地域の実際の取り組みについて知ることで、水害を身近に認識することができた。

データの収集方法やその活用について学習し、自らの行動につなげることを考えた。

自分たちの身の回りに存在していた防災関連施設に目を向け、災害時に活用する準備ができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

旧版の地形図や土地利用図を見せる際、同時期の市川を写した写真を用いた。自分たちの現在住んでいる地域における過去の水害をデータだけではなく、より詳細なイメージを持てるように構成した。過去の水害を過去のものとするのではなく、身近なものとしてとらえられるよう工夫した。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

防災・減災教育を授業に取り入れるためには、防災・減災の意識と授業を関連づけられるような幅広い知識をもつことが重要である。

生徒にとって普段過ごしている地域の水害は身近な問題として認識されていない。一度視点を変えて認識すると、より深く認識されることが分かった。

微地形の調査を行うためには、精度の高い専用のＧＰＳが必要である。

学校名	横浜市立横浜総合高等学校
担当教員名	小市　聡

活動のテーマ	大規模災害被災直後からの地域における高校生の役割を検討実施する。そのために震災から３年を機にボランティアからインターンシップに切り替えた試みを実施する。
主な教科領域等	教科領域（　　総合的な学習の時間　　）参加生徒（　　全学年　　５２　名）
実践期間	平成　２６年　４月　１日　　～　　平成　２７年　３月　３１日
想定する災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 （地震）・ 津波 ・（台風）・ 洪水 ・ 河川氾濫 ・ 土砂 ・ その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

人口密度、７５歳以上の高齢者人口が高く、外国人家族が多数居住し、地理的には東西に河川が流れ、起伏が激しいという地域の条件のもと、発災時から公的救助の本格化するまでの期間を中心に高校生が救助や避難所運営に貢献できるような日頃からのコミュニケーションを作らせている。大規模災害被災時に貢献する意識と知識や経験を持った高校生の育成を目的としている。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

被災直後の地域における高校生の役割を想定した地域貢献として、地域の特質を学び、小中学生、高齢者、地域の外国人と連携し、商店街の協力を経て、地域振興を兼ねたオリジナルイベントを企画実践する。

小学生：地域昔話朗読交流	9月 →	地域減災　共同イベント ・減災展示　・物産販売 ・商品開発　・東北報告	←通年	商店街イベント協力
高齢者：唱歌を歌う集い	6・9月→			
外国人：日本昔話朗読交流	4月→		←8月	東北インターンシップ
障害者：福祉イベント交流	12月→			

10月実施　日頃の交流を結合して減災イベントを主催。販売利益で被災時に役立つ消耗品、備品購入

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・小学生との交流方法、全国的な連携の作り方などのヒントを得た。
・助成金により、東北インターンシップが実施できた。生徒は被災地の現状を直接見ることにより、復興に向けた理想と現実のギャップを感じることができた。従来のボランティア活動ではなく産業復興貢献を職業体験に絡めて実施する方向に切り替えた。体験を通して現地での就職や地元地域での可能な貢献などを考えるきっかけとなった。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

地域の被災時共助にあたる組織の母体はできた。今後は組織と人の継続性に対する配慮が必要になると思われる。組織の継続には被災時の状況を地域の特性をつかみながら、内容の更新が新しいアイデアをもって継続されていく必要がある。人の継続は将来的に高校生が地域の大人リーダーになり、小学生が中心である高校生として活動していくことが望まれる。厳組織の中で今後も携わる人材を少しでも多く確保す

る方策が求められる。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・あいさつ、マナーなど基本的なコミュニケーションの実践とそれに伴うホスピタリティ精神を身に着けた。
・自己の企画を実現するためにプレゼンテーション力を高め、交渉力、組織力、実行力を身に着けた。
・学校外の人との接触により、様々な人に対して臨機応変かつ積極的に関わる態度が見られた。
・東北でのインターンシップ体験により、被災地の当時の状況や現状を見学し、自分たちの関わる使命を自覚するとともに、復興と産業、復興と就業の問題などを考えるきっかけになった。これらの体験は後の合同イベントに現地の現状報告や物産販売、地域での共助にかかわる説明を説得力ある内容に仕上げた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

自治会や行政が主導になって運営される組織とは異なり、高校生が孫の世代にあたる高齢者、おにいさんおねえさんにあたる小学生、留学生と年齢の近い外国人留学生などの関係は和やかなコミュニケーションを形成し、組織運営に良い影響を与えた。このようなコミュニケーションが小学生、高齢者、外国人という横の関係にもつながり、目標達成の原動力にもつながっていった。

高齢者との唱歌による交流

宮城県石巻市にてカキの出荷作業体験

地域商店街での現在イベント＆東北報告

5）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

「参加者みんなが楽しく活動」をテーマに、悲壮感、切迫感、義務感をあまり表面に出さないことにより、生徒の自由な発想が生かされ、楽しみながらの貢献活動になっている。生徒以外の参加者も唱歌や物産販売、昔話朗読、外国人交流など関連性がないものが減災という課題に結び付けられているため、楽しさが継続性に結び付けられている。今後、別分野との交流においても柔軟に対応できる地盤となっている。

6）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

高校生が中心になることにより、高齢者が活性化し、持つ知恵や経験、技術が生かされる環境ができた。外国人も同様に自国文化を伝える機会となり、それが地域貢献につながる流れとなった。反面、小学生は習い事との兼ね合いや保護者同伴の条件などの改善が必要に感じた。障害者に関してはさらに制約が多い。また、活動理解のためのマスコミの活用について方策を練る必要を感じた。東北での経験を継続するための資金も課題である。

学校名	大阪私立羽衣学園高等学校
担当教員名	米田　謙三

活動のテーマ	「災害に対する国際比較から身近な防災へ」
主な教科領域等	教科領域（英語・情報・公民・総合的な学習）参加生徒（　高校１・２学年　２８０名）
実践期間	平成２６年５月１日　～　平成２７年２月１０日
想定する災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（大雨・灌漑）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

(1) 国内や海外の生徒と意見交換を実施して、自然災害は国・地域によって様々あり、それぞれの減災（防災）教育があることを理解し、具体的に個人個人が近い将来に来る南海地震に備えることの大切さを知る。（自然とのつながり）

(2) 人間のいのちと尊厳を育む

１）災害に対して正しい知識をもち、自ら考え、判断し、危険から身を守る方法を身につける。

２）生徒が主体的に防災に取り組めるような「気づき、考え、実行する」を重視してコミュニケーション力、想像力、創造力を養う。

３）思いやり、優しさ、いのちの大切さを養い、未来につなぐいのちを学ぶ

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

活動編　5月 大阪府青少年赤十字活動　高校生代表者　会議参加（年間3回）、タイから教員養成研修メンバー５０名　受け入れ　ESDについて学びあい（外務省、国際交流基金共催）タイの防災に関しても学ぶ　タイの一番の災害は、洪水と津波

7月　タイ、マレーシア、台湾、アメリカ　日本　で掲示板サイトを作成。　アンケート実施、分析、意見交換を実施。

7月　交換留学　イギリス３週間派遣　高２男子１名　　大阪府グローバル塾　イギリス派遣　高２女子１名

8月　ユネスコスクール　北京人民大学附属高校から３名受け入れ　英語プレゼン大会出場　ホームステイおよび奈良訪問

中国では災害といえば今は大気汚染。空気が本当に汚い。日本の空は青い。空気が澄んでいることに感動するなど違いを知る。

8月　高石市姉妹都市アメリカ　ロミタ市からの訪問交流会　　Ｗｅｂ会議も実施　　ロスの災害は灌漑、ハリケーン

8月　ユネスコ協会連盟　東日本大震災を心と記憶にとどめるユネスコ・ボランティア　交流ツアー　生徒２名参加。　校内発表。

8月　日本赤十字大阪支部主催 献血スクール参加　10名参加　　森ノ宮血液センター

10月　学園祭にて　世界の学校の無い地域に学校をという呼びかけ！　カンボジアの生活品展示・募金活動

10月　インドネシア高校生徒の交流訪問　２６名ロボット授業実施　　高校1年生　全生徒と一緒に東大寺、薬師寺訪問

11月　　ユネスコ世界大会（岡山）　大阪メンバーとして生徒５名参加

11月　　日本赤十字国際交流集会　Mt.Fuji 大阪代表参加　世界20か国より参加　　災害についての意見交換も実施

12月 日本赤十字大阪府支部　防災プログラム参加　炊き出し体験、救急法体験　　災害時の体験をする。

12月　台湾へ訪問し　現地高校生とボランティア活動について意見交換会実施　　生徒１４名参加

１月　産学連携　エネルギー企画　　関西電力、読売新聞　出前授業実施

１月　気象庁と連携した　大雨災害ワークショップ　豪雨のとき、避難経路他、どのように対応していのちを守るかを考える

2月　ワンワールドフェスティバル　発表およびボランティアスタッフ

災害ルート作成編1学期から9月　南海地震について調べる。また災害マップについても調べる、

安全かつ速やかに徒歩で自宅に帰宅するための帰宅経路モデルを作成する。講演会実施

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

東日本大震災に関する情報のリソースを紹介いただき、南海地震の参考になった。助成金によって海外のメンバーとの交流に役立った。より具体的な交流ができた。日本赤十字社や気象庁など他の期間と連携して映像なども活用したグループワークなども取り入れることができた。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

大きな災害時が発生したときには，交通網の停止，火災や道路の損壊など日常では考えられない危機的状況が想定される。今回自分で安全かつ速やかに徒歩で自宅に帰宅するための帰宅経路モデルを作成することで、実際に災害時の帰宅を効果的に支援するために災害時に想定される要素を組み込むことができた。結果として実用性の高い、災害時のあらゆる状況にも判断・対応できるように直観的に分かりやすいモデルを作成することができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

実際にいろいろな研修や体験学習を実施することで生徒は、自分の命を守る力を身につけることと、学校や地域、家庭に防災を広めることで、防災意識を高め、周りの命を救うことができる、そのために思いやりの心を育てることも大切だという考えを持つ生徒が多く見受けられた。海外の生徒と災害をテーマに交流を実施することで今までとは違う交流（学び合い）ができた。特に東南アジアの生徒は洪水を一番の災害にあげることがおおく、異文化理解の一助となった。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

自然災害の危険に際して自らの命を守り抜くための「主体的に行動する態度」を育成することと支援者となる視点から、安全で安心な社会作りに貢献する意識を高める必要と被災時における安全を確保するための防災管理・組織活動の充実・徹底の必要性を学ぶことができた。

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

高校生が自ら調査して身近にある問題のモデルを設定、立案し表現すること　と　海外のメンバーとは、テレビ会議や掲示板等を利用し、防災をテーマに英語を使って交流することで、多様な背景をもつ同世代とコミュニケーションする力、協働する力を育むことができた。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

今回一番大切に思ったことは　やはり防災の意識をしっかりと持たせることであるとわかった。事前に避難ルートを考えること、家族とのやりとりの方法を決めておくこと。「主体的に行動する」力を身につけることをもっとさせていきたい。災害に適切に対応する能力の基礎を培うことの大切さを感じた。　具体的には

１）現在および将来に直面する災害に対して的確な思考・判断に基づく適切な意思決定や行動選択ができるようにする。

２）地震・台風の発生などに伴う危険を理解・予測し、自らの安全を確保するための行動ができるようにするとともに、日常的な備えができるようにする。

３）自他の生命を尊重し、安全で安心な社会づくりの重要性を認識して、学校、家庭および地域社会の安全活動に進んで参加・協力し、貢献できるようにする

さらに継続実施できるように地域との連携、外部のサポート、校内のサポート体制、国内、国外の協力体制（ネットワーク）、複数教科での連携をはかりたい。

７）その他（※特にあれば記述）

学校名	岡山県立真庭高等学校　落合校地
担当教員名	武村克彦

活動のテーマ	「地域防災」をテーマにした総合的学習と、生徒実行委員会の活動を継続しながら、これまでの防災教育活動で得た防災スキルを、地域の方や小学生に「伝えること」を通して、防災活動で高校生のできることを認識し自覚を高める。
主な教科領域等	教科領域（総合的学習の時間・特別活動）参加生徒（１，２学年１６５名）
実践期間	平成２６年　５月　１日　～　平成２７年　１月　３０日
想定する災害	地震　・　津波　・　台風　・　洪水　・　河川氾濫　・　土砂　・　その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

以下のイベントや学習を通して生徒の地域への認識と防災意識・所属意識，自己有用感を高め，同時に地域や小学生の防災意識を高める

〇かまどベンチを作成し，近隣の小学校や町内会に提案。〇地域合同防災訓練で地域住民を交えた訓練の実施。

〇小学生対象の「子ども防災dayキャンプ」を実施。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール

〇総合的学習におけるかまどベンチの作成　9月～1月

1学期後半から夏休みにかけて，近隣の小学校や町内会にも作成を呼びかけたが，小学校は構造物の設置に許可が下りないことで断念した。町内会については高校が最大の避難場所であるので，そこにある方がよいとの回答を得た。また，高校に設置することで，防災訓練時にも使用できることなどから，本校内に一基作成することにした。1月30日の成果発表会で、地域の方や大学研究者を招いて総合学習の発表を行った。

〇子ども防災dayキャンプの実施（8月19日）　準備合宿（8月4日，5日）

これまでの本校の防災活動を、地域の小学生に伝えたいとの気持ちから、生徒と教員によりキャンプを企画。消防署、消防団、真庭市教育委員会、等の協力により、３０名の小学生を招いて行った。

高校生は、体験班のリーダーとして小学生を引っ張り、８つの体験ブースの運営を行うことで、防災スキルの説明を行った。専門の団体（赤十字などのNGO）を利用しなかったことで、生徒がお客様になることもなく、主体的に取り組むことができた。また、当キャンプの準備合宿を行い、「伝える」準備を行った。

〇地域合同防災訓練の実施(10月8日)

これまでの防災訓練が逃げる訓練だったのに対し、一昨年からすべての生徒が何らかの役割を持つ訓練に変えた。今年度は、地域の方にも訓練に入っていただけるようにお願いして、地域の住民１３人が訪れた。

かまどベンチを使っての炊き出し、応急トイレの設置も行った。

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。　昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

〇生徒を直接指導する立場にある若手教員２名の参加をさせていただき，研修の報告を全教員に向けて行った。被災地から遠い地域で防災教育を行っているが，ともすれば過去のものと認識されがちな震災について，自らの見聞したことを生徒に伝えることができたことは，10月に行われた地域合同防災訓練における生徒の指導に大いに役立った。

〇地域の住民や小学生と関連した防災イベントを行う場合，防災意識を向上させるためのグッズは不可欠となる。これまで県の予算などでは扱うことのできなかった「缶バッジ」を作成することができ，かまどベンチの作成を行うことができた。公費では「やってみる」とか，「参加者に配布する」ものに支出ができにくい。目に見えるものを作成することができて，参加者の防災意識もこれまで以上に進んだと考えられる。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

防災(減災)学習は，ともすれば観念的な学習となりがちである。本校の防災教育は実際に活動して，考えることを目標においている。今年度は，地域あるいは小学生に伝える手段として，かまどベンチや缶バッジなどを作成することによって，単なる調べ学習や講演による疑似体験といった受け身の学習からの転換ができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

かまどベンチの作成によって、実際に防災拠点を作った意識が高まり、作成者以外の生徒も、防災拠点となっている学校に通っているという意識を持たせることができた。（ベンチのモニュメント効果）

子ども防災dayキャンプでは、年少の児童に的確に伝えることの難しさを感じた反面、頼りにされることで自分たちの防災活動の学習をさらに深めたい、続けたいと感じている。地域合同防災訓練では、すべての生徒が何らかの役割を持って参加できた（傍観者とならなかった）ことで、受身の訓練から、能動的な訓練になり、充実感もあったようだ。来年度もスタッフになり実施計画したいという生徒も多くなった。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

地域の方にも自分たちの避難所であるという意識を持っていただくことができた。来年はもっと参加したい、他の人にも呼びかけたいという感想が見られた。教師としては、生徒の自己有用感が高まったように感じている。実際に、参加した３年生は地域への感心を深め、地域おこしの方面への大学進学を実現した。また、地域社会の中の高校生としての自覚を高めることは、学習意欲の向上と問題行動の減少にもつながっている。

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

防災学習の行事で、生徒を受身にしないために、活動できる、企画できる時間や、内容を与えたこと。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

住民や小学生の参加については、保険などがネックとなって、実施しにくい状況がある。しかし、来年度住民の参加者を子どもキャンプに加えることで、世代を超えた地域全体の活動に発展できるようにしたい。そのなかで高校生が中心となって主体的な活動を行うことで、彼らの学習がより深まることと考えている。

学校名	高知県立高知南高等学校
担当教員名	竹島洋文

活動のテーマ	地域を元気にする防災教育
主な教科領域等	教科領域（　総合的な学習の時間　　）参加生徒（　２　学年　　１０　名）
実践期間	平成　２６　年　７　月　１　日　　～　　平成　２７　年　２　月　　日
想定する災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（　　）

活動報告

１）活動の目的・ねらい

生徒や地域住民が、科学的に地震に対する知識を得るとともに、防災に対する意識を高め、連携してハザードマップを作成する。この活動を通して、高齢化の進む地域の活性化や地域との関わり方を学習する。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

本校周辺を、防災上危険な場所や避難するのに最適な場所を歩いて調べ、ハザードマップを作成する。また、作成に協力していただける住民への戸別訪問を行い、避難する上での課題や安全上の悩みを聞き取り、課題を明らかにし、地域全体でその課題を共有した。以下は、本活動に関わった実践発表・実践である。

〇高知県高等学校教育研究会理科部会　第１２回理科研究大会（平成２６年１１月２９日）

東日本大震災から三年半すぎた被災地の様子の報告や高知県でも予想される災害についての備えを発表した。

〇防災学習会（Ｈ２６年１２月６日）

９月研修会で学んだ小中学校の取組を紹介し、本校でできることや危機管理の喫緊の課題について話し合った。また、地域の防災マップについては、避難ビルや予想される危険を記したものを地域の方々と共に作成し、活用する。

〇マネジメント学習発表会（Ｈ２６年１２月１９日）

・総合的な学習の時間の中で「地域住民と防災を考える」、「南海地震について」をテーマとし、校内外の学校周辺の地理を調べ、住民の方から防災意識や避難行動への悩みを聞き取り、南海トラフ地震対策をまとめて発表した。発表会の参加者は、中学校３年生、高等学校１・２年生で合計５４８名であった。また、来賓・保護者・地域の住民の方４１名が出席した。

〇地域の建物の高さの測定及び避難時間の計測（Ｈ２６年９月～）

地域の四階建て以上のコンクリート建造物のそれぞれの階の窓の高さを測定し、地盤高から建物の浸水の高さを予測した。また、地域周辺の道路や通路の徒歩でかかる時間を計測し、津波到来までにどこの避難ビルに避難することが適切か考察した。このことを参考に防災マップを作成する。

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

研修会で学んだ児童生徒の発達段階に応じた防災教育の必要性を学校内外で伝え、自校でも中学校、高等学校と連携した防災教育を推進するきっかけとなった。また、助成金により測量機器を購入し、地域の建物の高さを測定し、防災マップの内容の充実につなげた。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

他県の防災教育を参考に、本県でも危惧される南海トラフ地震に対する備えを進めることができた。特に総合的な学習の時間で防災学習の充実を図るとともに、地域とのつながりを深めることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

総合的な学習の時間での活動により、生徒の通学路や地域の避難場所が明らかになるとともに、子どもたちや地域の防災意識の向上につながった。本校周辺は、地域の住民の高齢化が進んでいるが、この活動を通して地域の活性化を進めるとともに、生徒たちの社会への関わり方を学習できた。特に、コミュニケーション能力や表現力を身に付けることができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

地域の方々には今回の取組を通じてさらなる学校の教育活動の協力・支援をいただいた。具体的には、防災意識や避難行動への悩みの聞き取りをきっかけとして、地域の過去の地理についてお聞きしたり、自転車の乗り方の交通安全の指導を受けたりした。また、今年度初めて地域と合同で避難訓練を実施し、学校と地域との連携を図るとともに防災意識が向上した。

５）自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

・防災マップ作成のためにレーザー距離計を使い地域の様子を詳細に把握した。

・地域との防災活動や総合的な学習の時間の活動を通じて、高齢化がすすむ地域の活性化につながった。

６）実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

地域とともに防災教育を進めるためには、高齢化の進む地域の実態を把握し、学校の危機管理を地域に伝え、どのような避難行動をとるかを説明する。

今回高等学校での計画・実践を行ったが、中学校や小学校とも連携し発達段階に応じた系統立てた防災教育を検討したい。

７）その他

↓マネジメント学習（本校のキャリア教育の一つの課題解決型の学習）発表会の時のパネル

↓地域の建物の高を測定している様子